

豪商田中本家の雛人形

A Study of the Hina Dolls of the Wealthy Tanaka Family
NAGASAWA Toshiaki

長沢利明

はじめに

田中本家は北信地方に広くその名の知られた有数の豪商家であり、長野県須坂市穀町四七六番地にあるその屋敷地が現在、田中本家博物館として一般公開されている。田中一族の総本家という意味で田中本家といい、略して「田本」と称されることもあった。初代当主の田中新八は1699年（元禄12年）に仁礼村で生まれ、須坂に出て奉公人から身を起こし、1733年（享保18年）に独立して小山村上新田（現在の須坂市穀町）に居をかまえ、商家の経営を始めた。以来、代々の当主が米・菜種油・煙草・綿などの売買取引を中心に手広く商売を展開し、酒造業や金融業までいとなみつつ巨財を成すに至り、ついには須坂藩の御用商人にまでなった。田中本家博物館の前館長をつとめられた田中宏和氏は、田中本家の第12代当主である。

田中本家の約3千坪にも及ぶその屋敷地内には、20棟もの土蔵が立ち並び、代々の当主の蒐集した書画・陶磁器・漆器などの古美術品、衣裳・生活調度品・玩具などの生活用具類、商取引や藩御用に関する記録史料類などの膨大なコレクションが、そこに保存されている。その数は、整理の済んだものだけで約2万点と推計されており、「近世の正倉院」と呼びならわされてきたことは、何らの誇張でもなかった[市川,1994:p.21]。この田中本家博物館からの全面的な協力のもと、国立歴史民俗博物館の手で実施されてきた田中本家の所蔵コレクションの総合的な調査は、2010年から2012年までの3年間にわたって実施されてきたわけであるが、そこでの筆者の主たる担当は、雛人形の調査・記録作業ということになっていた。作業は、近世期・明治期・大正期・昭和期のそれぞれの時代ごとに、3年間を要して実施されることとなったが、取り扱った雛人形と雛道具類、関連資料の点数もまた非常に数多く、まさしく豪商家の格式を誇るに十分な内容をなすものであった。本稿では、その調査成果を報告するものであるが、この作業を通じて、江戸風俗や江戸工芸というものが、いかにして地方の豪商家層にまでもたらされていったのかという課題の一端を、とらえてみることができるであろう。

1 田中本家の雛人形と雛祭り

1-1 雛人形の保存状況

田中本家に所蔵されている雛人形の数量は、田中本家博物館の所蔵品目録台帳によれば、計247

点と記録されている。ここには市松人形（大型28点・小型50点）も含まれているが、それらを差し引いたとしても、多くの雛人形は対人形・組人形となっているので、単体人形の数で集計するならば、かなりの数に達することであろう。さらに人形の付属品や雛道具類、雛段・垂幕・屏風・花器・供物器などの類をそこに加えるならば、相当な数量になるものと思われる。今回の調査では、それらのほぼすべてを記録におさめたが、ここではあくまでも雛壇上に飾られる雛人形のみを的をしぼって、報告をこころみるものとし、市松人形・御所人形などの愛玩人形や雛道具類については、今回は取り上げないものとする。田中本家の雛人形コレクションは、質量ともに当地方随一の規模を誇るもので、近世期・明治期・大正期・昭和期の各時代のものがよく揃い、保存状況も良好である。しかも個々の人形がいつ、そして誰の初節供祝に、どの人物から贈られたものかという来歴が割合によく判明し、その製造業者名・販売業者名・価格のわかるものも含まれている。さらには個々の人形の、その購入時の領収証さえ残されているものもあるうえに、雛段上での飾り方の配置図も何点かあって〔鈴木,1994:p.15〕、資料的価値がきわめて高い。

これらの雛人形類の保管収蔵施設として重要な役割を果たしてきたのが「^{ひなどぞう}雛土蔵」で、田中本家には雛人形の収蔵のための専用の土蔵が設けられていたのであり、あわせて五月人形や羽子板などの節供・正月関係用品、玩具や縁起物類などもみな、そこに保管しておくならわしが守られてきた。同家の20棟の土蔵群のうち、街道に面した屋敷内西側の、表門・番小屋の左手に3棟の土蔵が並び立っているが、これらは家財道具類の収納庫となっていて〔大河,1994:pp.51-52〕、その真ん中の1棟が雛土蔵であった（図1）。すべての雛人形は今でも土蔵内保管という伝統的な方式で保存がなされており、機械的な空調・除湿措置はいっさい取られていない。土蔵内の年間の気温変動は大きいですが、1日の温度差は少なく、短期間の温度変化のもたらす膨張・収縮による収蔵品の劣化が発生しにくいといい、

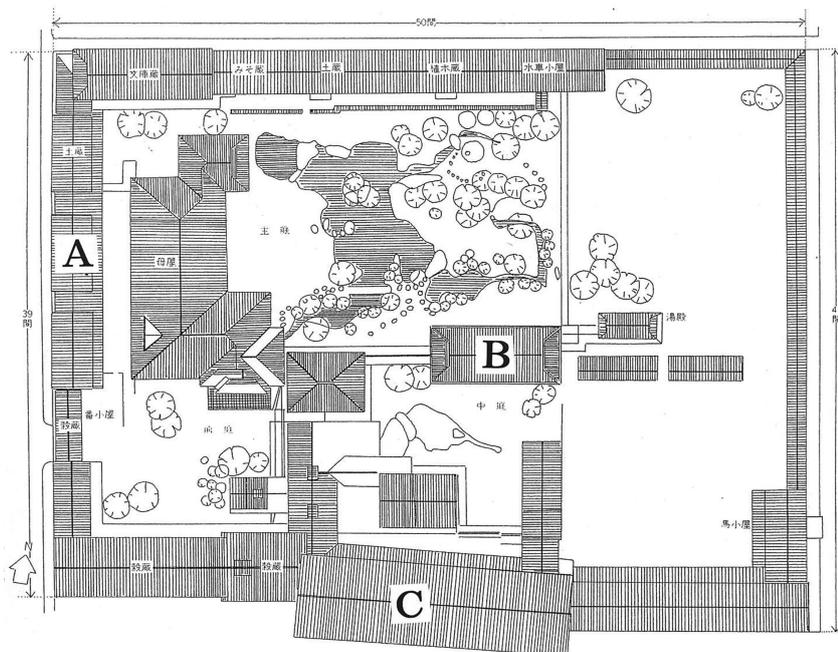


図1 田中本家の屋敷図

注) Aが雛土蔵, Bが客殿, Cが現在の展示場所。原図は『田中本家の古文書』による〔田中, 1989〕。

土蔵の保存性の高さが再評価されてもいる [宮川,2002:pp.38-39]。しかし、1870年(明治3年)12月17日に勃発した須坂騒動の際、1500～1600人もの一揆勢は容赦なく田中本家の土蔵群を襲撃して火をかけ、焼け残った土蔵はわずか1棟のみで、居宅・酒蔵はことごとく焼失したといい、損害額は7万両に達したと伝えられる [青木,1994:p.86]。須坂全体では名主・町役人・豪商・豪農家の122棟が、焼き打ちにあったと記録されている。雛土蔵の収蔵品も多大な損害を受け、近世期の雛人形の多くが失われたことは、誠に残念なことであったといえる。

明治～大正期の田中本家では毎年、三月節供の雛祭りがおこなわれていたというが、昭和期に入ってからあまりなされることなく、雛人形もしばらくの間は雛土蔵の中で眠り続けたままの状態であったという。久々にその封印が解かれたのは、第二次大戦後の1951年(昭和26年)のことであった。前年の1950年に誕生した、後の第12代当主夫人となる田中洋子氏(現在の田中本家博物館副館長)の初節供祝が、この年におこなわれる際、せっかく土蔵の中にたくさんの人形があるのだから、たまには出して飾ってみようという話になったという。そうして雛土蔵内のすべての雛人形が蔵の外に取り出され、再び日の目を浴びることとなったのはよいが、あまりに人形の数が多過ぎて、そのひとつひとつを木箱の中から取り出すのも大仕事であった。そこで分家の親類筋や出入り職人らが総出で出仕して、人形の運搬や雛段の組み立てをおこない、手先の器用な人々は細部の飾り付けを担当して、ようやく雛人形飾りができあがった。写真1はその時の記念写真であるが、中央に座る幼児が満零歳の洋子氏である。背後にある大きな6段飾りの雛段が近世・明治期の雛人形群で、上部の垂幕には田中本家の家紋である違釘抜紋が大きく染め抜かれている。左手には大正期の雛人形群が飾られ、御殿雛の屋根も見える。右手奥にある7段飾りが洋子氏の雛段で、昭和期の雛人形ということになり、さらに右手前に並ぶのが市松人形群であった。中央の雛段における人形の飾り方



写真1 1951年時の雛飾り(田中本家博物館提供)

は、後述する1894年(明治27年)時の雛飾図を参考にし、ほぼ忠実にそれに従ったものであった。

その後の田中本家では5～6年に1度、虫干しを兼ねて雛飾りをおこなってきたといい、屋敷内の中央にある客殿(今日の迎賓館)の2階座敷に、三方の壁に沿ってぎっしりと雛段を並べ、座敷中が雛人形で埋め尽くされるがごとくの様相で、雛飾りがなされてきたという。1993年(平成5年)に博物館を開館してからは、展示室の中で毎年それがなされるようになり、一般にも公開されるようになった。そのことは当然、人形の劣化を早め、損傷のリスクを高める結果になるのであるから、同家では細心の注意を払って人形の保存・管理に尽力をしてきた。雛土蔵から人形を運び出す際には、まず昭和期のものから着手して、次に大正期・明治期のものへという順序でおこない、最後に近世期の人形を慎重に取り出す。人形は個々の木箱の中に納められ、封印されているので、目張りを解いて蓋を開ける。中から取り出された人形を台座上に組み立て、装身具や持ち物を付けさせていくのも、大変な労力をともなう作業である。展示が終れば人形を再び雛土蔵に戻さねばならないが、きわめて念入りの防虫・防湿措置をその時にほどこして、梱包・収納・目張りをしなければならぬ。一体一体の人形の顔面を真綿で包み、和紙をあててコヨリで縛り、覆面のようにしてから木箱に納め、隙間にはたくさんの和紙を詰め込んで人形を衝撃から守る。和紙の詰物は防湿効果を高めており[宮川,2002:pp.38-39]、防虫面では藤沢樟脳がもっともよいとされている。木箱の蓋には、和紙帯を二重に貼って目張りをほどこす。雛人形を梱包した大量の木箱は、こうして再び雛土蔵の奥深く納められ、1年間の眠りにつく。現当主夫人は毎年、雛土蔵を開ける時と閉める時に、必ず蔵の中で深々と頭を下げて、蔵の神様に拝礼するならわしを守っておられるとのことである。

1-2 雛祭り行事の実態

次に、この田中本家の内々の雛祭りが、どのようにおこなわれてきたのかということをも、見ておかねばならないが、雛人形のコレクションにおいては屈指の規模を誇る田中本家であるとはいえ、昭和～平成期の三月節供行事が、必ずしもさほど盛況になされてきたというわけではないということは、上述の通りである。それは1950年における田中洋子氏の出生以来、女兒の誕生がしばらくなかったことや、時の当主が地方政治家として活躍したため家族も非常に多忙で、節供行事などをいとなく余裕があまりなかったことによるものであったろう。明治～大正期のその実態を知る家人も、いまやいないのであるから、豪商家の節供行事の実態がどのようなものであったのかを、今知ることはほとんどできなくなってしまった。

とはいえ、田中本家博物館の例年の雛祭りの展示の際に、必ず出展される『萬賄方控帳』という幕末期の書付史料があって、当時の雛節供祝の料理献立などが詳細に記録されており、その方面からするかつての三月節供祝の実態の一面を、いくらかは知ることができる。ここに記された、1847年(弘化4年)から1851年(嘉永4年)に至るまでの4年間分の、節供祝の祝膳の内容を参考までに、そのまま以下に引用してみることにしよう。

資料1 萬賄方控帳(弘化四年)

三月三日 節句煮染拵左之通

重詰	椎茸、蓮根、三田芋、卷鶏卵、小海老
次ノ口重詰	氷豆腐、干瓢、牛蒡、蘿蔔、鳥貝、割富貴
重詰	尾張割干大根、短冊獨活、青菜

三月三日 吉向行阿，山下八右衛門，山三郎参り

酒出久事

重詰 但前文通品

鉢 鮭刺身，ホウフ，摺山葵

これは1847年（弘化4年）時における節供料理であるが、3段の重箱に煮しめ物を詰めるというのが、田中本家の基本的な家例となっていた。一ノ重には椎茸・蓮根・里芋・焼玉子巻・海老の5品、二ノ重には凍豆腐・干瓢・牛蒡・大根（蘿蔔）^{すずしろ}・鳥貝・蕨の6品、三ノ重には切干大根・独活・青菜の3品を詰め合わせている。来客に対しては酒をすすめ、上記の重詰のほかに鉢に盛った鮭の刺身（防風・山葵添え）を添えている。海から遠い内陸地方に位置しながらも、日本海側の新潟方面から鮮魚類（ここでは海老・鳥貝・鮭）を豊富に取り寄せて用いるというのが、田中本家の祝料理の特色で、特に鮭の刺身は欠かせないものであったようである [奥村,1994:p.117]。

資料2 萬賄方控帳（弘化五年）

三月節句雛祭煮染

重詰上ノ口 厚焼鶏卵，方蓮根，握蒲鉾，皮牛蒡，干瓢，干鮓，獨活

重詰次ノ口 氷豆腐，卷壽留免，干瓢，海鹿，ツト豆腐

重詰 尾張割干大根，短冊獨活，五分菜

鉢 干鱈

翌1848年（弘化5年）時の献立には多少の変化が見られ、一ノ重に厚焼玉子・蓮根・蒲鉾・牛蒡・干瓢・干鮓・独活の7品、二ノ重に凍豆腐・するめ巻・干瓢^{あめふらし}・海鹿（海素麴）^{つと}・筒豆腐の5品、三ノ重に切干大根・独活・青菜の3品を詰め、七・五・三の聖数に合わせている。酒肴に添える鉢物には干鱈が用いられていた。

資料3 諸客賄方控帳（嘉永二年）

三月三日雛飾煮染，左之通

上ノ口重詰，但御紋重入四重，朱提重入八重，青漆角丸五重

大魚小串，厚焼鶏卵，板附蒲鉾，蓮根アチャラ煮，長芋照煮，椎茸甘煮，剥海老，富貴甘煮，漬蕨，右五品宛詰合

次之口重詰，但尾長鳥蒔絵四重，黒内朱重五重，丸重四重

握蒲鉾，富貴，卷壽留免，氷豆腐，三田芋照煮，干瓢，ツト豆腐，鮭小串，皮牛蒡，右五品宛詰合致す

提重吸筒上ノ小重 鮭刺身，短冊獨活，スリ山葵

急須 濃溜り

鉢 尾張干大根，短冊獨活，五分芹

三月三日節句礼ながら土屋修蔵殿，中沢新治殿，西原小右衛門殿御出成られ八疊敷え通す，賄方左の通り

吸物 口柚，榮螺，獨活

鉢 鮭刺身，短冊獨活，摺山葵

口執 上ノ口，煮染物

大平 栄螺, 雪割茸, 相良麩

この1849年(嘉永2年)時の献立はひとときわ豪華であって、久々に初節供祝がなされたためであった。第5代当主、新十郎信秀(主水)と先妻慶(4代当主新十郎信堅の妻、峯が慶と改名して弟と再縁)との間に生れた娘、於棹が4代当主の長男五八郎家に嫁ぎ、生まれた娘が於袖で、当時は田中本家に同居をしていた。第5代当主にとっての初孫であった於袖は、1848年(嘉永元年)10月7日生まれで、その翌年3月に初節供祝がなされることとなった(図2)。初節供祝の料理は、一ノ重だけで四重の御紋入重箱、八重の提重、五重の角丸重が用いられ、串焼魚・厚焼玉子・板蒲鉾・蓮根アチャラ煮・山芋照焼煮・椎茸甘煮・剥海老・落甘煮・漬蕨などを5品ずつを盛る。二ノ重には四重の蒔絵重、五重の黒内朱重箱、四重の丸重箱が用いられ、握蒲鉾・落・するめ巻・凍豆腐・里芋煮・干瓢・筒豆腐・焼鮭・牛蒡などが、やはり5品ずつ盛られた。三ノ重には鮭刺身・短冊独活が盛られて溜醬油・山葵を添え、さらに切干大根・短冊独活・芹の鉢物がついた。訪れた祝客に対しては、吸物(栄螺・独活・柚子)、鉢物(鮭刺身・短冊獨活・山葵)、口取物(煮染)、大平盛(栄

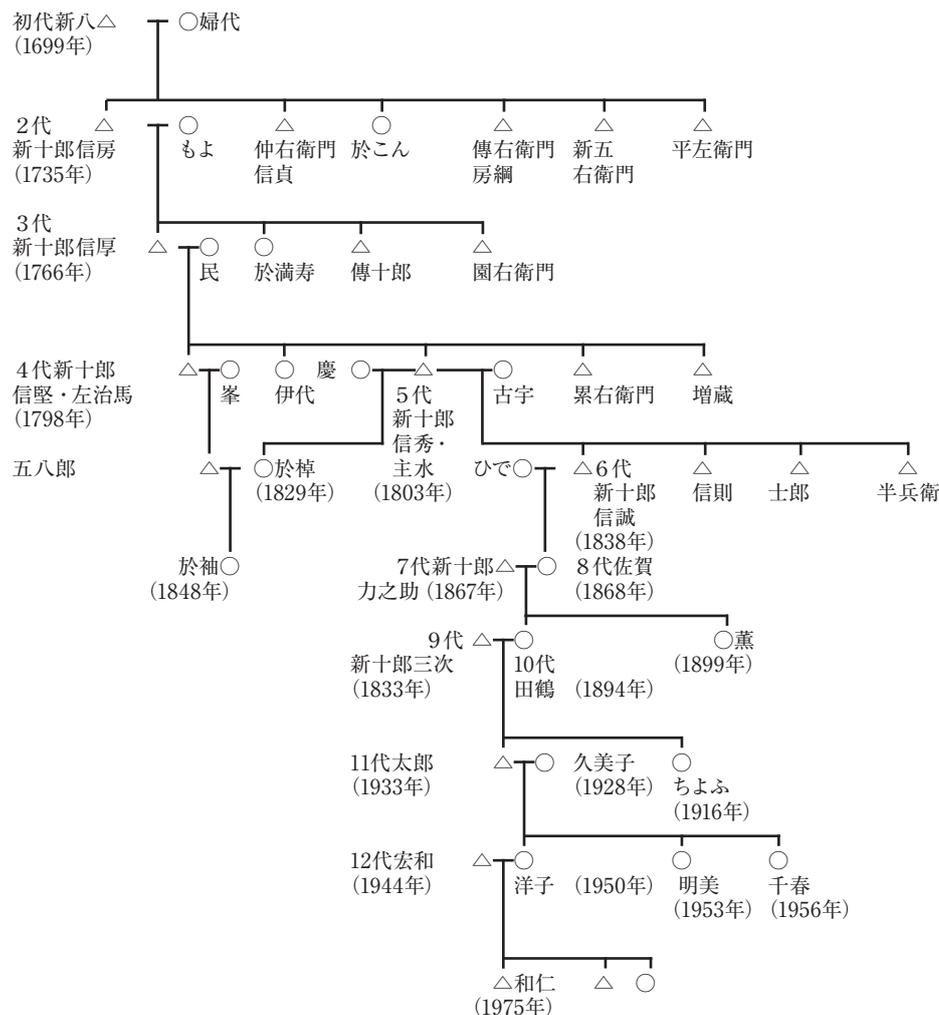


図2 田中本家の系譜
注)出生年を()内に示す。

螺・雪割茸・相良麩)を振る舞ったという。

資料4 諸客賄方控帳(嘉永四年)

三月三日御改革に付、中門座敷へ内々雛飾致、右に付煮染左之通

重詰 厚焼鶏卵、蓮根甘煮、三田芋煮附、鳥貝煮附、ツト豆腐、皮牛蒡、板附蒲鉾、相良麩

次重詰 氷豆腐、漬蕨、巻鯛、里芋、鳥貝煮附、巻鶏卵、ツト豆腐

鉢 蒨蓼草、鱈節掛

鉢 三盃酢掛、雪菜、割干大根

鉢 干鱈

2年後の1851年(嘉永4年)時には豪華絢爛な祝宴も陰をひそめたかの観があるが、「御改革にて」とあるように、この年には須坂藩の藩政改革にもなう華美禁止令が出されていたためである。中門座敷に雛人形を飾って、内々での祝をしたとあるが、料理の内容は従前通りのものに戻っただけで、さほどに顕著な儉約・簡素化の傾向が見られたわけでもない。いずれにしても、『萬賄方控帳』に見られるこれらの幕末期の祝膳記録からは、当時の田中本家の三月節供行事に関する家例習俗を、よく知ることができる。雛人形飾り以外の関連習俗の側面からする、節供行事の総括的な把握のためにも、これらの史料はその一助となることであろう。なお田中本家博物館では毎年3月の企画展の際に、この『萬賄方控帳』の記録をもとに近世期の節供料理を再現しての食事会を開催しており[田中,2012:p.29]、好評を博している。

2 近世期の雛人形

2-1 享保雛の内裏雛

さてここからは、それぞれの時代ごとにまとめながら、田中本家の所蔵する近世～近現代期の雛人形コレクションの実情について、今回の調査成果をもとに、その特色や由来伝承、関連資料情報などをも含めつつ、解説をくわえていってみることにしよう。以下、それを時代別に見ていくことにするが、まずは近世期のものについて、ここで取り上げてみたい。今回の調査を通じて確認された田中本家所蔵の近世期の雛人形は、表1に見るように計7点18体となっている(表1)。ここには、明治期のものである可能性を持つ人形もいくつか含まれているが、田中本家博物館では例年の企画展示の際、これらを一括して近世期の人形として公開しており(写真2)、収蔵台帳上でもそのように分類されているので、ここではそれに従っておくものとする。

かつての田中本家の雛土蔵には、江戸より買い求めてきて当家に納められた、数多くの豪華な江戸期の雛人形が保管されていたと伝えられている。しかし、このように現存するものは、わずか16体に過ぎないのであって、決して多いとはいえない。その理由はいうまでもなく、1870年(明治3年)における須坂騒動の焼き打ち被災に求められよう。多くの人形が騒動の渦中に失われたことは明らかである。田中本家の広大な屋敷地内であって、人形の収蔵庫としての雛土蔵は街道に面した西側中央部に位置しており、一揆勢の襲撃を直接もろに受ける結果になったものと思われ、もっとも大きな被害がそこでもたらされたであろうと推察される。多くの江戸期の人形類が灰燼に帰したことは、取り返しのつかない損失であったが、そのような中でも、かろうじて外に持ち出され、難を逃れて守られた名品中の名品が、今も残る5点16体ではなかったろうか。その5点中には、享

保雛の内裏雛一対と、原舟月作とされる五人組人形「若殿様子供行列」1組が含まれていたとい
い、いずれも美術工芸面で大変すぐれた逸品であるとされ、緊急避難の優先順位でいえば、まさに
最高位の地位にあったため、真っ先に持ち出されて難を逃れたと伝えられる。雛人形以外の収蔵品
について見た時、それでも近世期の文化財が、今日まで割合に多く残されているので、当時の騒動
の被害調書には誇張に過ぎた面がややあったのではないかと、この見解も聞かれるわけであるが〔青
木,1994:p.86〕、雛人形について見た場合、それはあまりあてはまらないといえるかも知れない。

これら近世期の雛人形中で筆頭的な地位を占めるものは、唯一の内裏雛としての表中No.1-1・1-2
の1点2体である。近世期の内裏雛はこれ以外には存在せず、きわめて貴重な存在であって、しか
もこの内裏雛は形式的には、いわゆる「享保雛」に分類されるものである。面長で能面調の顔立ち
で切れ長の目をしており、衣裳に金襴・錦をふんだんに使用し、男雛は東帯衣裳の裾をぴんと跳ね
上げて両足を前で合わせ（写真3）、女雛は五衣・唐衣姿で紅袴いつぎぬ からごろもの下半身を詰綿で極端にふくらま
せている（写真4）、といった具合に、享保雛の典型的な特徴をよくとどめており、大変古風な面影

表1 近世期の雛人形一覧

No.	名称	計測値	備考	写真
1-1	内裏雛(男雛)		享保雛	3
1-2	内裏雛(女雛)		享保雛	4
2-1	五人囃子(平太鼓)	240		
2-2	五人囃子(大皮鼓)	240		5
2-3	五人囃子(小鼓)	240		
2-4	五人囃子(笛)	240		
2-5	五人囃子(謡)	240		
3-1	若殿様子供行列(犬曳)	249	原舟月作と伝えられる	6
3-2	若殿様子供行列(若侍)	250	原舟月作と伝えられる	6・7
3-3	若殿様子供行列(春駒若殿)	233	原舟月作と伝えられる	6・7
3-4	若殿様子供行列(弓持)	240	原舟月作と伝えられる	6・7
3-5	若殿様子供行列(槍持)	250	原舟月作と伝えられる	6・7
4	菊慈童	234		8
5-1	業平東下り(左笠持)	105		9
5-2	業平東下り(在原業平)	155		9
5-3	業平東下り(右笠持)	105		9
6	リボンの娘	157	名称は仮称(明治期のものか)	
7	町女房	215	名称は仮称(明治期のものか)	

注)計測値は台座を含まない全高のみを表示し、単位はmm。



写真2 展示中の近世期の雛人形



写真3 享保雛(男雛・No.1-1)



写真4 享保雛(女雛・No.1-2)

を残している。しかも、造りが非常に豪華であって、人形自体の大きさも享保雛としては大型の部類に属するうえに、台座の造りも非常に精巧で、かつ重厚である。男雛の太刀の柄には本鮫皮が巻かれているし、女雛の金冠瓔珞も、かなり破損してはいるものの、非常に精緻な造りを見せている。長野県内では、たとえば上田市内における原町の成沢家や柳町の岡崎家、常磐町の米倉家、越戸の井澤家、横町の田口家、神科新屋の武井家など、あるいは東部町桜井の寺島家などに享保雛が残されているが [上田市立博物館(編),2003:pp.1-17], いずれもさほどに古い時代のものではない。時には同市内横町の田口家のもののように、頭部と冠が共造りで髪を植えずに黒く塗った作例などもあり [同:p.15・是澤,2003:p.47], 寛永雛とも共通した古風な特徴を示しているが、あくまでも例外的であって、同市内の享保雛と称するものは、実はそのほとんどが近世後期に作られたものである。

近世期における雛人形の型式別変遷は、寛永雛→享保雛→次郎左衛門雛→有職雛→古今雛の順で推移していったと、一般にはいわれている。とはいうものの、初期の寛永雛は別として、次郎左衛門雛や享保雛は、その登場期の型式的特徴を、人形師らが後代まで長らく踏襲する傾向も見られた。享保雛の典型的な特徴が後世にまで引き継がれていくことがよくあったわけで、そうした特徴を備えた雛人形があるからといって、それが享保期を中心とする近世中期の人形作品であるとは、かならずしもいえない。そうした擬古調の内裏雛は近世末期にも、一部は明治初期に至るまで、さかんに製作されていて、特に地方の人形師社会にあっては長らくその伝統が維持されていた。上田市の享保雛の多くも、もちろんそうしたものであって、田中本家の享保雛の洗練された様式美には遠く及ばない。

2-2 その他の雛人形と原舟月

享保雛以外の雛人形としては、まずはNo.2-1～2-5の「五人囃子」があげられる(写真5)。きらびやかな金襴装束の豪華さといい、平太鼓・大皮鼓・小鼓・笛などの楽器や太刀の精巧な造りといい、古今雛の名品であって保存状態も非常によく、衣裳の劣化や虫食いなどによる破損がほとんど見られない。頭部は幼児風の丸顔が強調され、ために髪を下げていて烏帽子を付けないのが特徴的である。こうした技巧表現をさらに高めつつ、ついに完成の域にまで達したといえるのが、次のNo.3-1～3-5の「若殿様子供行列」で、江戸の著名な人形師であった原舟月の作といわれている(写真6～7)。原舟月といえば、いうまでもなく江戸を代表する名人人形師であって、古今雛の完成者とも



写真5 五人囃子の内の一体 (No.2-2)



写真6 若殿様子供行列① (No.3-1～3-5)



写真7 若殿様子供行列② (No.3-2・3-3)

されている。文化・文政期の川柳に、「毛氈へのせて照りよき舟と月」・「いい細工顔もてらてら舟の月」とあるのは舟月作の雛人形の見事さを詠んでいるし、十軒店にいたもう1人の名工、川端玉山とともに「月と山」と並び称されることもあって、「雛市に月と山とは値が高し」などとも詠まれていた。『我衣』には、「文化の比は玉山，舟月両人の細工雛流行，尤も工み成物也。小きんといへるものはやる」とあって、舟月・玉山の人形製作の最盛期にあたる文化年間の頃の古今雛の流行のことが触れられている。名工として知られていた原舟月とは、正確に言えば2代舟月のことを指していて、1790年（寛政2年）の雛市改めで華美に過ぎたその作品が幕府に摘発され、咎めを受けたことで知られる舟月は、もちろん2代目である。2代舟月は1768年（明和5年）生まれで没年は1844年（天保15年）とされ、その製作期は寛政～天保初期（1790～1835年）の約45年間といわれている〔是澤,2003;pp.44-45〕。

「若殿様子供行列」は装束が豪華で持物の細工も精緻であり、田中本家の雛人形の中でも最高位の地位が与えられてきた。第5代当主、新十郎信秀（主水）が家督相続をした1824年（文政7年）頃に、これを江戸より求めてきたのであろうと伝えられている。5体の人形群は、大名の若君とその従者4名の行列という構成を取り、先頭を行くのが飼犬を曳いた従者家来、次に補佐役の若侍が続き、中央には春駒遊び姿の若君がいて、その後尾に弓持・槍持が続く。決まりきった雛人形の型式にとらわれぬ自由な創造性がそこにあって、人形師のすぐれた技術力・表現力が認められる。注目されるのは、若君の袴の肩と背中部分に田中本家の女紋である橘紋が縫い取られていることであって〔藤田,1994;p.39〕、特注品であったればこそ刺繍を入れさせることができたのであろう。田中本家の正式な家紋は、先述のごとく「違釘抜紋」であったが、女紋は「橘紋」もしくは「向橘紋」が用いられていて、婦人の着物や三月節供に用いる重箱などによくそれが使用されている〔田中,1994;pp.92-93〕。この「若殿様子供行列」が原舟月の作品であるとされてきたのは、人形を納める木箱の墨書に「舟月」とあることを根拠とするもので、人形研究家の藤田順子氏が初めてそれを見出し以来〔藤田,1994;p.38〕、その価値が認められてきたということであつたらしい。しかし、近年になってそれに疑義を唱える鑑定家もいるとのことで、今後への課題を残してもいる。

近世期の雛人形としては、これら以外にもNo.4の「菊慈童」と（写真8）、No.5-1～5-3の「業平東下り」（写真9）、さらにはNo.6の「リボンの娘」、No.7の「町女房」などがある。「菊慈童」は、細部に手の込んだ装飾を見せる見事な造りの単体の古今雛で、菊花を模した大きな冠と、錫器の花器に活けられた赤い菊の花枝が大変に異色で、存在感のある人形である。菊の葉の露を飲んで千年の



写真8 菊慈童 (No.4)



写真9 業平東下り (No.5-1～5-3)

長寿を授かったという、中国の菊慈童の説話がテーマとなっているが、謡曲や『太平記』などを通じて広くこの説話は巷間に知られており、京都嵯峨野の法輪寺では重陽の節供の日に、菊慈童の人形を飾って法会をおこなう風があって[長沢,1999:pp.226-227]、そのようなことなども雛人形の創作に影響を与えることがあったかも知れない。「業平東下り」の方は小型の組人形で、関東へ下る在原業平の一行を描きつつ、馬上の業平と2人の笠持従者によって構成されている。人形師の技術面については、さほどに見るべきものはなく、造りも粗雑で芸術性にも乏しいため、「菊慈童」とは比ぶべくもないが、この種の小型組人形が明治期以降は非常な流行を見せ、多作されるようになっていくので、その先駆的な作品として重要であろう。

なお、田中本家博物館における今日の展示公開時における近世期の雛飾りは(写真2)、基本的に4段飾りの雛段を用いていて、最上段には享保雛の内裏雛一対(No.1-1・1-2)を置き、その左右に雪洞一対を配置し、背後に金屏風を立て、上からは橘紋入りの雛段幕を垂らす。2段目には「五人囃子(No.2-1～2-5)」を置き、3段目には両脇に角徳利、その内側に裸人形一対(鞆鼓持・鯛持)、中央に「菊慈童(No.4)」と「町女房(No.7)」とが配置される。4段目には膳一対・鉢・湯桶などが置かれる。この場合、「若殿様子供行列(No.3-1～3-5)」はここには置かれず、別展示という形を取っている。

2-3 雛飾図に見る雛段装飾

江戸時代の田中本家において、実際にどのような形で雛段上に個々の雛人形が並べられ、その装飾がなされていたのかということについては、何も記録が残されていないので、正確なことはわからない。とはいえ、そのおおよその姿を知るための手掛かりとなる貴重な史料が1点、伝えられているので、これについても見ておかねばならない。それは1870年(明治3年)の三月節供の際に、備忘録として記録されたものと思われる「雛飾附順席(午三月上巳改之)」と題された雛段の見取図で(写真10・表2)、明治期の資料であるとはいえ、維新からわずか2年後に記されたものである。近世期の実態をほぼそのまま伝えたものと見ることもできる。全国的に見ても、雛段の飾り方を記した記録資料はあまり多くはないし、この時代のものはきわめて貴重である。各地の旧家などに時折、そうしたものが残されてはいて、筆者もかつて東京都武蔵村山市三ツ木の比留間家のものを紹介してみたことがあるものの、1929年(昭和4年)のものに過ぎず、田中本家の資料よりも60年も新しい[長沢,2006:pp.1-5]。

この雛飾図の記録された年代については、上記の通り1870年(明治3年)3月と推定しておいたわけであったが、実をいえばそれについては、さまざまな議論がなされてきたところなのであって、そこにはただ「午三月上巳改之」と記されているに過ぎないのであるから、そこにいう午年とは一体、いつの午年のことを指しているのかが必ずしも明らかにはされていない。この問題について若干の検討をおこなってみると、まず雛段の上から4段目の両側に置かれている「コイ大トクリ(鯉大徳利)」と「ツル大トクリ(鶴大徳利)」とが注目される。この2つの大徳利は、花活けとして用いられたものと推察されるが、鯉絵と鶴絵の大徳利は2つとも田中本家に現存する。収蔵箱の蓋書には天保4年購入と記されているので、この雛飾図は少なくともそれ以降の時代に作成されたものであることがわかる。さらに、雛飾図上に登場する雛人形群の中には、後述する1894年(明治27

表2 1870年の雛飾図翻刻

萌黄内裏	黒大内裏 (No. 1-1・1-2)		黒内裏			
隨身 タコ (No. 2-1)	ルギ ヤマン	大ツヅミ (No. 2-2)	小ツヅミ (No. 2-3)	フイ 白ギヤマン (No. 2-4)	ウタイ 隨身 (No. 2-5)	
太鼓	カッコ	コト	ビハ	シャウ	横笛 ヒナキ	
能狂言	コイ大 トク	キヤマン 燭ガイ	イクラ ギヤマン	イクラ ギヤマン	ツル大 トク	車ヒキ
カ ジヤウ	ヒシチ	子供行 列五人 (No. 3-1~5)	菓子 一丁	ナヒラ東 クダリ (No. 5-1~3)	小人ジマ 老若女中	高尾 明神
品々	裸人形	古御道具 新御道具			梨地相マ 五重組小重	
品々	至朱 押絵	御膳部		皆朱 提重	御紋ザラ マキ提重	
	(鮮魚)			(鮮魚)	漆段	

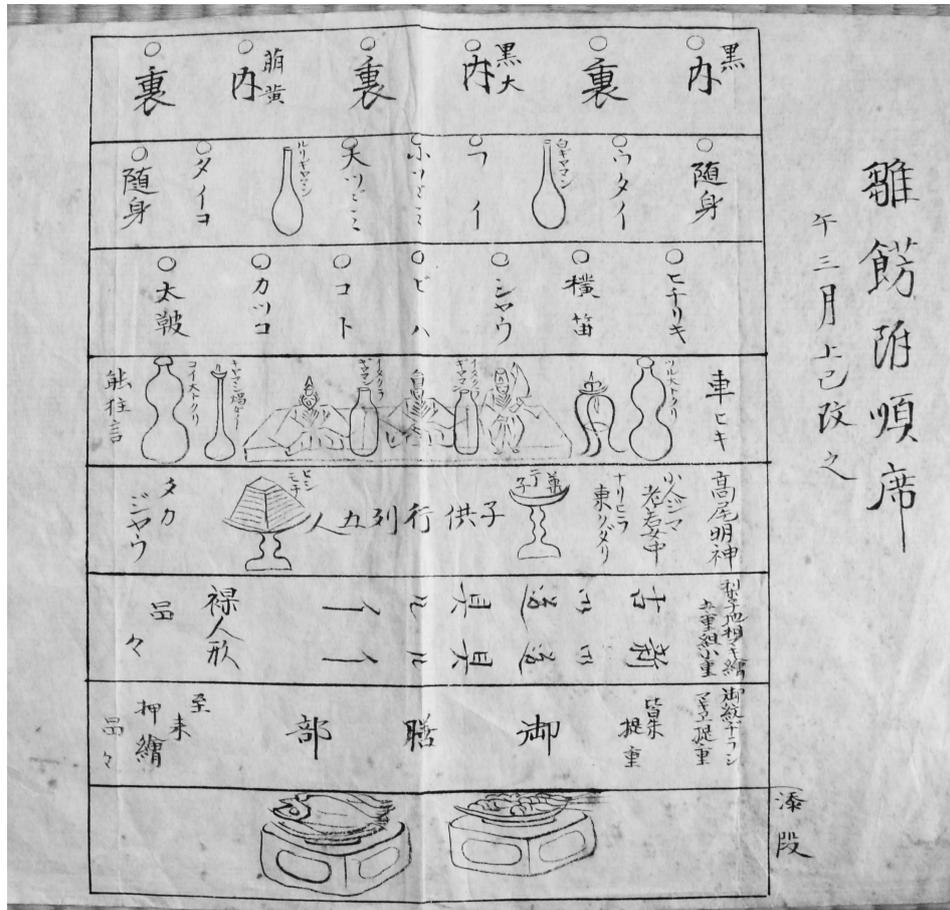


写真10 1870年の雛飾図

年)に一括して購入された雛人形類がひとつも含まれていないので、それ以前のものであることも判明する。従って雛飾図の作成年代は、1833年(天保4年)～1893年(明治26年)の60年間に限定されることとなる。そして、この60年間における午年の候補ということになると、1834年(天保5年)・1846年(弘化3年)・1858年(安政5年)・1870年(明治3年)・1882年(同15年)があげられるわけであるが、さまざまな事情を考慮して判断すると、1870年(明治3年)と推定するのが、もっとも妥当な線なのであって、田中本家博物館でもその立場を取っている[是澤・塩野谷・他,2003:p.101]。おそらくは、それでまちがいのないことであつたらうと思われるので、ここではそれに従った。

この雛飾図が1870年(明治3年)3月に作成されたものであるとすると、それは同年12月に起きた須坂騒動の、実に9ヶ月前に記録されたということになる。一揆騒動による被害を受ける前の時期の、しかも直前の記録としての重要性が再認識されねばならないであろう。暴徒による破壊をこうむる以前の田中本家の雛祭りは、このような形でなされていたのだということを、雛飾図は教えてくれているのであつた。そこで、雛飾図に記された雛人形や雛道具が、騒動の後にどうなったのかということ念頭に置きながら、その飾り方の実態をとらえ直していつてみることにしよう。まず雛段そのものであるが、8段飾りの造作となつており、しかも漆塗りの雛段であつたというのであるから、誠に豪華絢爛たるものであつたことがわかる。最上段には3組の内裏雛が並ぶというもの、豪商家ならではの豪勢さを表している。近世期における累代の当主が、長女を授かるたびに江戸に使いを送り、これらの内裏雛を求めてきたのではなかつたらうか。3組中の中央に置かれた「黒大内裏」・「萌黄内裏」・「黒内裏」は現存せず、騒動で失われたものと推察される。2段目の中心は「五人囃子」であつて、先のNo.2-1～2-5がまさにこれである。しかし、その両脇に配置されることになっていた隨身一対(左大臣・右大臣)と、「ルリ(瑠璃)ギヤマン」・「白ギヤマン」の一対のガラス製白酒徳利は現存しない。3段目に置かれている楽人人形群は、五人囃子ならぬ七人囃子(楽人)であつて、雅楽の管弦楽器構成となつており、太鼓・鞆鼓かつこ・琴・琵琶・笙・横笛ひちりき・箏を奏する7人の楽人が並ぶ。これについては、以下の記録が残されているので、ここに引用しておこう。

資料5 雛之書付(文政五年二月)

楽人七人立舞三人并掛盤膳椀ノ仕切也

覚

一、金七両也 壺尺楽人、極上々仕立七人揃、小道具壺式、同舞三人、同所(中略)

右之通代金槌受取申候、以上

二月七日

大坂や新兵衛(印)

上兵(上州屋兵右衛門)様

ここでの記載にならいつつ、この人形を「楽人七人立」と題しておくこととするが、1822年(文政5年)にこれを購入したということが、ここに判明する。購入先である大坂屋は、信州上田の原町にあつた雛問屋で、京都・大坂・江戸から雛人形の部品を手広く仕入れて人形に組み立て、信州一円に販売をしていた在地の雛人形商であつた[是澤,2003:pp.9:47-48]。大坂屋の雛人形は、今でも各地に多く残されているが、それらの中には五人囃子も多く含まれている。「楽人七人立」はおそ

く極上品で、それに舞人形3体をつけて金七両としたというその価格からも、それをうかがい知ることができる。なお上州屋兵右衛門は、田中本家からの依頼を受けて大坂屋へ出向いた仲介商人であったろう。まことに残念なことながら、この「楽人七人立」も「三人立舞人形」も現存せず、騒動で失われてしまったものと思われる。

次に雛段の4段目に目を移してみよう。ここにある鯉と鶴の大徳利は先述のように今もあるものの、「イタクラギヤマン」や「ギヤマン燭台」などの諸道具そして「能狂言」・「車ヒキ」などの雛人形類は、すでに存在しない。5段目の「タカジャウ（鷹匠）」・「小人ジマ老若女中」・「高尾明神」についても同様であって、どのような人形であったか、今となっては知るよしもない。とはいえ、「子供行列五人」とあるのは、もちろん現存の「若殿様子供行列（No.3-1～3-5）」のことであるし、「ナリヒラ東クダリ」とは今ある「業平東下り（No.5-1～5-3）」のことで、もっとも重要な人形群が残されたのは、さいわいなことであった。5～6段目にあげられている新旧の雛道具類についても、果してどれほどのものが残っているのか、検討をしてみなければならないが、これだけの情報では同定作業も困難をきわめることであつたろう。最下段の7段目に、大皿に盛られた尾頭つきの鮮魚が描かれているのにも目を見張るが、内陸の地にあつたにもかかわらず、祝事には何によらず遠く日本海から運ばれた鮮魚類が、このように贅沢に用いられてきたという田中本家の伝統が、ここにも表れている。

さて以上見てきたように、雛飾図に記された人形類のうち、確実に現存するといえるものは「五人囃子」、そして「若殿様子供行列」と「業平東下り」のみに過ぎないということが明らかとなった。なお現存の享保雛の内裏雛（No.1-1・1-2）については、なお検討の余地があるので、ここには含まれない。3対の内裏雛と「楽人七人立」、「能狂言」・「車曳」・「鷹匠」・「小人ジマ老若女中」・「高尾明神」などの人形類は、ことごとく失われているのであって、須坂騒動のもたらした被害がどれほどのものであつたかを雄弁に物語っている。田中本家における雛人形の伝承史上から見ると、ここに大きな断絶の存在することを認めざるを得ないのであって、「午三月上巳改之」を1870年（明治3年）と推定しうる最大の根拠がここにあるということになろう。須坂騒動のもたらした文化財面での損失は非常に大きなものだったのであって、それを過小評価することはもちろんできないであろう。また、この雛飾図に「午三月上巳改之」と記されているからには、この1870年（明治3年）という年に女兒の初節供祝がなされたものと見るべきで、それは第6代当主であった田中新十郎信誠の長女、田中佐賀の祝ではなかったかと筆者は推定している。佐賀は夫である第7代当主新十郎力之助に先立たれた後、第8代当主となるわけであったが、その生年は1868年（明治元年）で、通常ならばその翌年の1869年（同2年）3月に初節供祝がなされねばならなかった。ところが、維新にともなう藩行政の混乱があり、藩主が江戸表で割腹自殺をはかったことにともなう服喪ということなどもあって、田中本家では祝事を自粛していたとも考えられる。ために佐賀の初節供祝は、さらにその翌年の1870年（明治3年）3月になされたのではなかったろうか。そうに考えれば、すべてのつじつまが合うことであろう。さらに想像をたくましくするならば、No.5-1～5-3の「業平東下り」などは、その時に購入されたものではなかったろうか。雛飾図の描かれた年代推定は、きわめて複雑な社会事情の流れの中における絶妙なタイミングの内に求めるべきであつて、まさにそれは1870年（明治3年）という年以外には考えられないと、筆者は思う。

3 明治期の雛人形

3-1 明治期の雛人形の特徴

次に、明治期の雛人形について見てみることにしよう。この時代の雛人形の数量は非常に多く、今回の調査においては計40点93体を数え上げることができた(表3)。そして、それらのうちの計33点85体、すなわちその大部分は、第7代当主新十郎力之助の長女、田中田鶴の1894年(明治27年)における初節供祝にあたり、東京日本橋の老舗雛人形商から直接購入され、須坂の地まで運ばれてきた雛人形なのであって、後述するようにその領収証なども残されている。その購入先や購入価格、年代や来歴などがはっきりとわかる人形群として、きわめて重要性を持つものであることは、言をまたない。それらはさらに、19世紀末期というこの時代における雛人形の様式や流行の実態をよく記録するものとして、非常に資料的な価値が高い。人形の購入者についてみると、計5名の身内親族が計4点14体の人形を求めて田中本家へ贈っていることがわかるが、当主力之助自身が東京日本橋で買い付けさせた計20点48体には遠く及ばない。しかも、その20点48体とは領収証の残っているもののみについて数えたに過ぎず、おそらくは表3中のNo.1～19、20～21、22～31はすべて田中本家自身の直接購入品と思われる。すなわち、この時代の雛人形は、ほとんど当事家が自身で購入するものとなっているのであり、他家から贈られるものは圧倒的に少なかった。地元で雛人形商がおらず、東京から購入するほかなかったという事情を考えれば、当然の結果でもあり、それをなすことのできた田中本家自身が東京での買い付けをおこなっていたというのが、明治期の雛人形の大きな特色といえるであろう。

次に、この時代の雛人形に、どのようなものがあつたのかについても、ざっと見ておくことにしよう。まずは内裏雛であるが、4対の立派な内裏雛があつて、それぞれ一号～四号と名づけられているが、絢爛豪華な錦の衣裳に身を包んだ古今雛であつて、保存状況もきわめて良好である。人形の全高も台座高も大きな法量を呈し、近世期の伝統が引き継がれている。製造した人形師の名がほとんど判明しているというのも、明治期以降の雛人形の大きな特色であるが、内裏雛について見た場合、一・三～四号が鳳雲齋玉舟作で(No.1-1・1-2・3-1・3-2・4-1・4-2・写真12)、二号が千秋齋一峯作(No.2-1・2-2・写真11)となっており、いずれも東京日本橋に店を構える十軒店時代じっけんだな以来の老舗職人家であつた。購入時の価格を記した領収証も残されており、これもまた具体的な来歴の判明する重要な人形群といえよう。信州の在地の雛問屋からではなく、東京日本橋の老舗雛屋から当代最高級の人形類を直接購入し、はるばる須坂まで運んでいるところに、田中本家の財力と格式とをうかがうことができるが、この地方の他の素封家には見られぬことでもあつた。田中本家は近世期から江戸市中に何ヶ所もの江戸屋敷を所有しており、物品を通して中央文化を積極的に地方へ取り込む窓口として、それは大切な役割を果たしていた。江戸屋敷のひとつは日本橋通町にあり[田中,1994:pp.102-103]、そこは本石町を中心とした老舗雛屋の密集地区と、目と鼻の先の距離にある。玉舟や一峯の雛人形を容易に購入しうる条件下にあつたことは、いうまでもないことである。

内裏雛以外では三人官女・五人囃子・隨身など、さらには「狛曳官女(No.8・写真13)」・「神功皇后(No.13-1・13-2・写真15)」・「楽太鼓二人立(No.14-1・14-2)」・「宇津保(No.16-1～16-3)」・「弁慶進徳帳(No.17-1～17-3)」・「三條小鍛冶(No.18-1・18-2)」・「能人末広(No.19-1・19-2・写真16)」などの組人形

表3 明治期の雛人形一覧

No.	名称	計測値	寄贈時	寄贈者	人形の製造者	販売者	備考	写真
1-1	一号内裏雛(男雛)	273	1894	自家購入 (田中力之助)	鳳雲齋玉舟 (東京日本橋)	大丸	箱書「壹號内裡, 鳳雲齋玉舟(印)」, 人形に「壹号男」の墨書, 領収証②	
1-2	一号内裏雛(女雛)	237	1894	自家購入 (田中力之助)	鳳雲齋玉舟 (東京日本橋)	大丸	箱書「壹號内裡, 大丸」, 人形に「壹号女」の墨書, 領収証②	
2-1	二号内裏雛(男雛)	266	1894	自家購入 (田中力之助)	千秋齋一峯 (東京日本橋十軒店)	大丸	箱書「貳號内裡, 大丸」, 人形に「貳號但シ内裡ハ特別一等品」の墨書, 領収証⑤	11
2-2	二号内裏雛(女雛)	247	1894	自家購入 (田中力之助)	千秋齋一峯 (東京日本橋十軒店)	大丸	箱書「貳號内裡」, 人形に「貳號但シ内裡ハ特別一等品」の墨書, ラベル①・領収証⑤	11
3-1	三号内裏雛(男雛)	232	1894	自家購入 (田中力之助)	鳳雲齋玉舟 (東京日本橋)	大丸	箱書「參號内裡」, ラベル②・領収証②	12
3-2	三号内裏雛(女雛)	245	1894	自家購入 (田中力之助)	鳳雲齋玉舟 (東京日本橋)	大丸	箱書「參號内裡, 大丸」, ラベル②・領収証②	12
4-1	四号内裏雛(男雛)	226	1894		鳳雲齋玉舟 (東京日本橋)		箱書「四號内裡」, 人形に「四號但此ノ内裡上等」の墨書あり, ラベル②	
4-2	四号内裏雛(女雛)	187	1894		鳳雲齋玉舟 (東京日本橋)		箱書「四號内裡」, 人形に「四號但此ノ内裡上等」の墨書あり, ラベル②	
5-1	内裏雛(男雛)	215	1894					
5-2	内裏雛(女雛)	210	1894					
6-1	三人官女(提銚子)	222	1894	自家購入 (田中力之助)	鳳雲齋玉舟 (東京日本橋)		箱書「官女, 鳳雲齋玉舟」, 領収証②	
6-2	三人官女(鳥台)	222	1894	自家購入 (田中力之助)	鳳雲齋玉舟 (東京日本橋)		箱書「官女, 鳳雲齋玉舟」, 領収証②	
6-3	三人官女(長柄銚子)	222	1894	自家購入 (田中力之助)	鳳雲齋玉舟 (東京日本橋)		箱書「官女, 鳳雲齋玉舟」, 領収証②	
7-1	二柱神(伊弉諾尊)	225	1894	自家購入 (田中力之助)	千秋齋一峯 (東京日本橋十軒店)		箱書「二柱神」, ラベル②・領収証④	
7-2	二柱神(伊弉册尊)	225	1894	自家購入 (田中力之助)	千秋齋一峯 (東京日本橋十軒店)		箱書「二柱神」, ラベル②・領収証④	
8	狛曳官女	277	1894	自家購入 (田中力之助)	鳳雲齋玉舟 (東京日本橋)		箱書「矮狗曳官女」, ラベル②・領収証②	13
9	柳原権典侍	184	1894	自家購入 (田中力之助)	千秋齋一峯 (東京日本橋十軒店)		箱書「柳原権典侍」, ラベル①・領収証③	14
10-1	一号隨身(左大臣)	224	1894	自家購入 (田中力之助)	鳳雲齋玉舟 (東京日本橋)		箱書「隨身」, ラベル②・領収証②	
10-2	一号隨身(右大臣)	224	1894	自家購入 (田中力之助)	鳳雲齋玉舟 (東京日本橋)		箱書「隨身」, ラベル②・領収証②	
11-1	二号隨身(左大臣)	190	1894		鳳雲齋玉舟 (東京日本橋)		箱書「隨身」, ラベル②	
11-2	二号隨身(右大臣)	190	1894		鳳雲齋玉舟 (東京日本橋)		箱書「隨身」, ラベル②	
12-1	一号五人囃子(箏築)	203	1894	自家購入 (田中力之助)	鳳雲齋玉舟 (東京日本橋)		箱書「樂人, 五人之内」, ラベル②・領収証②	
12-2	一号五人囃子(竜笛)	203	1894	自家購入 (田中力之助)	鳳雲齋玉舟 (東京日本橋)		箱書「樂人, 五人之内」, ラベル②・領収証②	
12-3	一号五人囃子(笙)	203	1894	自家購入 (田中力之助)	鳳雲齋玉舟 (東京日本橋)		箱書「樂人, 五人之内」, ラベル②・領収証②	
12-4	一号五人囃子(小太鼓)	203	1894	自家購入 (田中力之助)	鳳雲齋玉舟 (東京日本橋)		箱書「樂人, 五人之内」, ラベル②・領収証②	
12-5	一号五人囃子(大太鼓)	203	1894	自家購入 (田中力之助)	鳳雲齋玉舟 (東京日本橋)		箱書「樂人, 五人之内」, ラベル②・領収証②	
13-1	神功皇后(竹内宿禰)	175	1894	自家購入 (田中力之助)	鳳雲齋玉舟 (東京日本橋)		箱書「神功皇后」, ラベル②・領収証②	15
13-2	神功皇后(皇后)	264	1894	自家購入 (田中力之助)	鳳雲齋玉舟 (東京日本橋)		箱書「神功皇后」, ラベル②・領収証②	15
14-1	楽太鼓二人立(右)	414	1894	自家購入 (田中力之助)	鳳雲齋玉舟 (東京日本橋)		箱書「樂太鼓二人立」, ラベル②・領収証②	
14-2	楽太鼓二人立(左)	414	1894	自家購入 (田中力之助)	鳳雲齋玉舟 (東京日本橋)		箱書「樂太鼓二人立」, ラベル②・領収証②	
15-1	高砂(尉)	313	1894	自家購入 (田中力之助)	千秋齋一峯 (東京日本橋十軒店)		箱書「高砂」, 領収証③	

15-2	高砂(姥)	294	1894	自家購入 (田中力之助)	千秋斎一峯 (東京日本橋十軒店)	箱書「高砂」, 領収証③	
16-1	宇津保(女大名)	287	1894	自家購入 (田中力之助)	鳳雲斎玉舟 (東京日本橋)	箱書「宇津保」, ラベル②・領収証②	
16-2	宇津保(猿曳)		1894	自家購入 (田中力之助)	鳳雲斎玉舟 (東京日本橋)	箱書「宇津保」, ラベル②・領収証②	
16-3	宇津保(猿)		1894	自家購入 (田中力之助)	鳳雲斎玉舟 (東京日本橋)	箱書「宇津保」, ラベル②・領収証②	
17-1	弁慶勸進帳(富樫)	297	1894	自家購入 (田中力之助)	鳳雲斎玉舟 (東京日本橋)	箱書「安宅関辨慶勸進帳」, ラベル②・領収証②	
17-2	弁慶勸進帳(弁慶)	274	1894	自家購入 (田中力之助)	鳳雲斎玉舟 (東京日本橋)	箱書「安宅関辨慶勸進帳」, ラベル②・領収証②	
17-3	弁慶勸進帳(義経)	174	1894	自家購入 (田中力之助)	鳳雲斎玉舟 (東京日本橋)	箱書「安宅関辨慶勸進帳」, ラベル②・領収証②	
18-1	三條小鍛冶(鍛冶屋)	284	1894	自家購入 (田中力之助)	鳳雲斎玉舟 (東京日本橋)	箱書「三條小鍛冶宗近」, ラベル②・領収証②	
18-2	三條小鍛冶(稻荷神)	284	1894	自家購入 (田中力之助)	鳳雲斎玉舟 (東京日本橋)	箱書「三條小鍛冶宗近」, ラベル②・領収証②	
19-1	能人末広(主人)	264	1894	自家購入 (田中力之助)	鳳雲斎玉舟 (東京日本橋)	箱書「能人末広」, ラベル②・領収証②	16
19-2	能人末広(太郎冠者)	268	1894	自家購入 (田中力之助)	鳳雲斎玉舟 (東京日本橋)	箱書「能人末広」, ラベル②・領収証②	16
20-1	能人石橋(シテ)	262	1894	田中録助	千秋斎一峯 (東京日本橋十軒店)	箱書「能人石橋」, 但田中録助ヨリ祝品, ラベル①	17
20-2	能人石橋(ワキ)	165	1894	田中録助	千秋斎一峯 (東京日本橋十軒店)	箱書「能人石橋」, 但田中録助ヨリ祝品, ラベル①	17
21-1	中型官女(提銚子)	224	1894		千秋斎一峯 (東京日本橋十軒店)	箱書「中形官女一組在沖」, この箱上ニする な	
21-2	中型官女(鳥台)	134	1894		千秋斎一峯 (東京日本橋十軒店)	箱書「中形官女一組在沖」, この箱上ニする な	
21-3	中型官女(長柄銚子)	216	1894		千秋斎一峯 (東京日本橋十軒店)	箱書「中形官女一組在沖」, この箱上ニする な	
22-1	二号五人囃子(平太鼓)	154	1894	田中秀太	鳳雲斎玉舟 (東京日本橋)	箱書「五人囃子」, 但田中秀太ヨリ祝品, ラベル②	
22-2	二号五人囃子(大皮鼓)	182	1894	田中秀太	鳳雲斎玉舟 (東京日本橋)	箱書「五人囃子」, 但田中秀太ヨリ祝品, ラベル②	
22-3	二号五人囃子(小鼓)	179	1894	田中秀太	鳳雲斎玉舟 (東京日本橋)	箱書「五人囃子」, 但田中秀太ヨリ祝品, ラベル②	
22-4	二号五人囃子(笛)	146	1894	田中秀太	鳳雲斎玉舟 (東京日本橋)	箱書「五人囃子」, 但田中秀太ヨリ祝品, ラベル②	
22-5	二号五人囃子(謡)	144	1894	田中秀太	鳳雲斎玉舟 (東京日本橋)	箱書「五人囃子」, 但田中秀太ヨリ祝品, ラベル②	
23-1	三号隨身(左大臣)	190	1894				
23-2	三号隨身(右大臣)	190	1894				
24-1	飾馬(馬)	254	1894	自家購入 (田中力之助)	千秋斎一峯 (東京日本橋十軒店)	箱書「飾馬」, 附り別當添」, 領収証③	
24-2	飾馬(別当)		1894	自家購入 (田中力之助)	千秋斎一峯 (東京日本橋十軒店)	箱書「飾馬」, 附り別當添」, 領収証③	
25-1	舞姫二人立(右)	174	1894			台座は別物で「加藤清正の虎退治の台」 とも墨書あり	
25-2	舞姫二人立(左)	174	1894			台座は別物で「加藤清正の虎退治の台」 とも墨書あり	
26-1	小型内裏雛(男雛)	99	1894		鳳雲斎玉舟 (東京日本橋)	箱書「小形内裡」, ラベル②	
26-2	小型内裏雛(女雛)	92	1894		鳳雲斎玉舟 (東京日本橋)	箱書「小形内裡」, ラベル②	
27-1	一号小型官女(提銚子)	126	1894	自家購入 (田中力之助)	鳳雲斎玉舟 (東京日本橋)	箱書「小形女官」, 鳳雲斎玉舟(印)」, 領 収証①	
27-2	一号小型官女(鳥台)	88	1894	自家購入 (田中力之助)	鳳雲斎玉舟 (東京日本橋)	箱書「小形女官」, 鳳雲斎玉舟(印)」, 領 収証①	
27-3	一号小型官女 (長柄銚子)	228	1894	自家購入 (田中力之助)	鳳雲斎玉舟 (東京日本橋)	箱書「小形女官」, 鳳雲斎玉舟(印)」, 領 収証①	

28-1	小型隨身(左大臣)	119	1894	自家購入 (田中力之助)	鳳雲斎玉舟 (東京日本橋)		箱書「小形隨身壹對」, ラベル②・領収証①
28-2	小型隨身(右大臣)	119	1894	自家購入 (田中力之助)	鳳雲斎玉舟 (東京日本橋)		箱書「小形隨身壹對」, ラベル②・領収証①
29-1	一号小型五人囃子 (平太鼓)	90	1894	自家購入 (田中力之助)	千秋斎一峯 (東京日本橋十軒店)		箱書「小形五人囃」, ラベル②・領収証③
29-2	一号小型五人囃子 (大皮鼓)	115	1894	自家購入 (田中力之助)	千秋斎一峯 (東京日本橋十軒店)		箱書「小形五人囃」, ラベル②・領収証③
29-3	一号小型五人囃子 (小鼓)	115	1894	自家購入 (田中力之助)	千秋斎一峯 (東京日本橋十軒店)		箱書「小形五人囃」, ラベル②・領収証③
29-4	一号小型五人囃子 (笛)	88	1894	自家購入 (田中力之助)	千秋斎一峯 (東京日本橋十軒店)		箱書「小形五人囃」, ラベル②・領収証③
29-5	一号小型五人囃子 (謡)	94	1894	自家購入 (田中力之助)	千秋斎一峯 (東京日本橋十軒店)		箱書「小形五人囃」, ラベル②・領収証③
30-1	二号小型官女 (提鉞子)	66	1894		光玉		箱書「小形官女, 此箱翌ニスベカラズ, 光玉(印)」, ラベル③
30-2	二号小型官女 (鳥台)	120	1894		光玉		箱書「小形官女, 此箱翌ニスベカラズ, 光玉(印)」, ラベル③
30-3	二号小型官女 (長柄鉞子)	67	1894		光玉		箱書「小形官女, 此箱翌ニスベカラズ, 光玉(印)」, ラベル③
31-1	二号小型五人囃子 (平太鼓)	50	1894				箱書「小形五人囃子」
31-2	二号小型五人囃子 (大皮鼓)	74	1894				箱書「小形五人囃子」
31-3	二号小型五人囃子 (小鼓)	70	1894				箱書「小形五人囃子」
31-4	二号小型五人囃子(笛)	52	1894				箱書「小形五人囃子」
31-5	二号小型五人囃子(謡)	50	1894				箱書「小形五人囃子」
32-1	中型五人囃子 (平太鼓)	144	1899	深沢清吉・ 田中和広			箱書「中形五人囃在中, 関公像寿老神, 深澤清吉・田中和広様右之者ヨリ祝品」
32-2	中型五人囃子 (大皮鼓)	195	1899	深沢清吉・ 田中和広			箱書「中形五人囃在中, 関公像寿老神, 深澤清吉・田中和広様右之者ヨリ祝品」
32-3	中型五人囃子 (小鼓)	194	1899	深沢清吉・ 田中和広			箱書「中形五人囃在中, 関公像寿老神, 深澤清吉・田中和広様右之者ヨリ祝品」
32-4	中型五人囃子(笛)	146	1899	深沢清吉・ 田中和広			箱書「中形五人囃在中, 関公像寿老神, 深澤清吉・田中和広様右之者ヨリ祝品」
32-5	中型五人囃子(謡)	154	1899	深沢清吉・ 田中和広			箱書「中形五人囃在中, 関公像寿老神, 深澤清吉・田中和広様右之者ヨリ祝品」
33-1	中型隨身(左大臣)	190	1894	田中文平			箱書「中形隨身, 但田中文平祝品」
33-2	中型隨身(右大臣)	194	1894	田中文平			箱書「中形隨身, 但田中文平祝品」
34	当世美人	337			三越呉服店 (東京日本橋)	三越呉服店	箱書「当世美人」, ラベル④
35-1	琴と三味線(琴)	160					
35-2	琴と三味線(三味線)	166					
36	神武天皇	380					台座は別物で「為朝」との墨書あり
37	竜宮乙姫	440					台座に「五月」との墨書あり
38	翁	236					
39	竹内宿禰	184					台座は別物で「鷹匠」との墨書あり
40	恵比須	216					

注) 計測値は台座を含めない全高で表示し, 単位はmm。No.23・38は今回の調査で確認できなかったが, 田中本家博物館の収蔵台帳に記載されているので, 表示しておいた。



写真11 二号内裏雛 (No.2-1・2-2)



写真12 三号内裏雛 (No.3-1・3-2)



写真13 矮狗官女 (No.8)



写真14 柳原権典侍 (No.9)



写真15 神功皇后 (No.13-1・13-2)



写真16 能人末広 (No.19-1・19-2)



写真17 能人石橋 (No.20-1・20-2)

がみな玉舟作で、玉舟作の雛人形は計18点45体を数える。これに対して一峯作は三人官女・五人囃子・高砂などのほか、「二柱神 (No. 7-1・7-2)」・「柳原権典侍 (No. 9・写真14)」・「能人石橋 (No. 20-1・20-2・写真17)」・「飾馬 (No. 24-1・24-2)」などがあり、計8点19体を数える。これらについても購入時の領収証がほとんど残されていて、購入価格なども知ることができる。玉舟・一峯以外では、光玉作の「小型三人官女」が1点3体、三越呉服店作が1点1体あるに過ぎない。なお玉舟作五人囃子 (No. 12-1～12-5) は、大太鼓・小太鼓・笙・竜笛・箏で構成される雅楽版の五人囃子であって、先述した近世期の「楽人七人立」に通ずるものがあり、なかなか興味深い。また、「小型内裏雛 (No. 26-1・26-2)」・「小型三人官女 (No. 27-1～27-3・30-1～30-3)」・「小型隨身 (No. 28-1・28-2)」・「小型五人囃子 (No. 29-1～29-5・No. 31-1～31-5)」などのミニチュア雛人形が流行するのもこの時代の特色であって、いわゆる「芥子雛」というものがこれであり、田中本家の所蔵品中にもいくつかその作例が見られる。

明治期の雛人形にはこれらのほかにも、実に多彩なテーマやモチーフの描かれたものがいろいろあり、三人官女・五人囃子・隨身・高砂などの、ごく一般的な人形以外にも、さまざまなものが見られて大変興味深い。たとえば、同じ官女でも「狎曳官女」や「柳原権典侍」などといったものがあり、前者は愛玩犬の狎を曳いた単体の官女人形で、狎は宮中などでよく飼われていたといい、貴族社会の風俗をよく描いている。身重姿の官女として描かれることもよくあり、犬の産が軽いことにちなむ安産祈願の意味も込められていたかも知れない。「狎曳官女」は、引き続き大正期の雛人形にもよく見られる。後者の官女人形は実在の官女を描いたもので、柳原権典侍とは要するに明治天皇の側室、そして大正天皇の生母であった。公卿の出身で本名を柳原愛子^{なるこ}といい、宮中に仕えて明治天皇の寵愛を受け、二位局と呼ばれて準皇族待遇を受けていた。明治時代におけるリアルタイムの話題を人形に表現しているわけで、いわば当時の現代雛・変わり雛の一型ともいえよう。人形を見ると、几帳の細やかな細工が実に見事である。大正期に入ると、「花車官女」というものが流行するのであるが、この時代にはまだ見られない。神話伝承に取材したテーマ人形というのも、王政復古の世相をよく表している。一峯作の「二柱神」は、伊弉諾尊・伊弉册尊の両神をうつしたもので、大きな木彫りの岩根上に男女神が立つという異色の姿の雛人形である。一峯作の人形には、このようにユニークなテーマがよく見られる。「神功皇后」もまた、明治期における流行の人形であって、皇后と皇后の産んだ赤子（後の応神天皇）を武内宿禰が抱くシーンを表している。すなわち、これは三韓征伐からの凱旋後の、九州筑紫での場面ということになる。

歌舞伎の名場面を描いた人形というものでは、意外に作例が乏しく、「弁慶勸進帳」以外には見られない。このテーマはその後の昭和期にもさかんに用いられてきているが、多くは富樫左衛門・武蔵坊弁慶・源義経の3人を1つの台座上に配置する小型の組人形であることが多く、ここでの例のように3者を別々の単体でこしらえて組み合わせ、安宅の関のシーンを描いているものは珍しい。とはいえ、この時代にあって歌舞伎の名場面よりも、もっとさかんに描写されたのは、何といても能・謡曲や狂言におけるそれである。「宇津保」は狂言の「鞆猿」^{うつぼ}から来ており、狩りに出た大名が猿曳に出会い、猿の皮で鞆を作ろうと猿を求めて射殺そうとするが、猿曳は自分が殺すと申し出て鞭を振り上げたところ、その鞭を猿が手に取って芸をするという話である。その不憫な姿に大名と猿曳は猿を殺すのをやめ、猿舞に興ずることとなるが、狂言では初舞台をつとめる幼児が猿役を演ずることとなっており、人形もまた猿に扮した子供の姿となっている。大名もまた、後に女大

名や奥女中にとって変わられることとなるが、この人形でも女の姿で描かれている。「能人末広^{すえひろ}」もまた狂言から取材したもので、主人の命で都に末広（扇）を求めに行かされた太郎冠者が、末広とは傘のことだと悪商人にだまされて古傘を買わされて戻り、主人に叱られるという話である。太郎冠者は悪商人から習った謡と舞とで主人の機嫌を取るが、人形では古傘を持って舞う太郎冠者の姿が描かれている。「石橋^{しやつきょう}」の場合は能の演目であるが、入唐した寂昭法師が清涼山の石橋で文殊菩薩の化身に出会い、文殊の霊獣である獅子の舞を見るシーンが人形のテーマとなっている。「三條小鍛冶」も謡曲の一テーマであって、京三条に住む刀工宗近が一条天皇の御剣を打つこととなり、稲荷山に籠って祈願をすると稲荷神が現われて向槌をつとめ、名刀狐丸を打つことができたとの物語を、組人形で表している。

3-2 関連する記録資料

明治期の雛人形については先述したように、その購入時の領収証や雛飾図などの関連資料も豊富に残されているので、おもなものについて一通り見ておくことにしよう。まずは領収証の類であるが、いずれも田中田鶴の初節供祝にともなうもので、1894年（明治27年）3月に東京日本橋の老舗雛人形商から直接、まとめてたくさん雛人形が購入された際の資料である。この時代には、すでに新暦が普及・定着しており、そのことがかえって地方における年中行事の中暦（月遅れ）化を促進する結果となって、信州の三月節供は新4月になされるのが通例となっていた。新暦節供の新3月直前に比べて人形の市販価格も下がっており、購入者側にとっては、節供の買物が非常に有利であったと伝えられてもいる。だからこそ領収証類の記された日付は、いずれも1894年（明治27年）3月3日以降となっているのであろう。まずは鳳雲齋玉舟の本店からの買物例を見てみよう。個々の人形には、表3のリストに掲げた通し番号が付されている。

資料6 領収証①（写真17）

記

- 一、上等小ツイ 一（No.28-1・28-2）
- 一、上等官女 一（No.27-1・27-2・27-3）
- 一金貳円也、右正に受取申候也

第三月六日

玉舟（印）

田中様

資料7 領収証②（写真18）

記

- 一、上等親王 式對（No.1-1・1-2・3-1・3-2）
- 一、上等官女 一（No.6-1・6-2・6-3）
- 一、上等ヅイ 一（No.10-1・10-2）
- 一、上等勸進長 一（No.17-1・17-2・17-3）
- 一、宇津保 一（No.16-1・16-2・16-3）
- 一、上等楽人 一（No.12-1・12-2・12-3・12-4・12-5）
- 一、クワエンタイコ 一（No.14-1・14-2）
- 一、官女チン引 一（No.8）

- 一、神竹之内 一 (No.13-1・13-2)
外ニ金九円也
一、小鍛冶 一 (No.18-1・18-2)
一、スエシロ 一 (No.19-1・19-2)
一金六拾円也、右正に受取申候也
第三月七日 玉舟 (印)

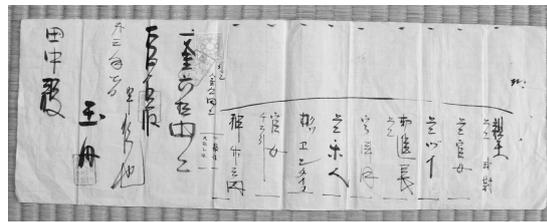


写真18 玉舟の領収証

田中様

ここからわかるように田中本家では、この年の3月6日にまず「小型隨身」と「一号小形官女」とを金2円で購入しており、とりあえずは2組の芥子雛のみの買物にとどめている。しかし、その翌日である3月7日には、計12組27体もの雛人形を一気にまとめ買いしており、この日だけでその支払い価格は計60円にも達している。これによって、「一号内裏雛」・「三号内裏雛」・「一号隨身」・「弁慶勸進帳」・「宇津保」・「一号五人囃子」・「楽太鼓二人立」・「狎曳官女」・「神宮皇后」・「三條小鍛冶」・「能人末広」などの、田中本家における明治期の主要な雛人形はほとんど揃えられたこととなるのであった。この日にはさらに、千秋斎一峯の本店からも買物をしていて、その後の3月11日の買物の分をもあわせれば、計6点14体が別に購入されているのであり、一峯への支払い額は計24円50銭に達している。その領収証の文面は、次の通りである。

資料8 領収証③

記

- 一、金十円也
一、金四円也 高砂壺組 (No.15-1・15-2), 五人林壺組 (No.29-1・29-2・29-3・29-4・29-5)
一、金六円也 柳原御前壺組 (No.9), 飾り馬人形付壺組 (No.24-1・24-2)

右之通り正に請取申候也

明治二十七年三月七日

日本橋区本石町三丁目壺番地 一峰本店(印)

上

資料9 領収証④

記

- 一、金五円五拾銭也
一、木地彫二神御人形壺組 (No.7-1・7-2)

右之通り正に請取申候也

明治二十七年三月七日

日本橋区本石町三丁目壺番地 一峰本店(印)

田中様

資料10 領収証⑤ (写真19)

記

- 一、金九円也、極上御親王雛壺對 (No.2-1・2-2)

右之通り正に請取申候也

明治二十七年三月十一日

日本橋区本石町三丁目壺番地 一峰本店(印)

田中様

一峯本店から求めた雛人形は、「二号内裏雛」・「二柱神」・「高砂」・「一号小型五人囃子」・「柳原権典侍」・「飾馬」の6点14体であって、これらもまた田中本家の収蔵人形群中で重要な位置を占めるものであった。この年の玉舟・一峯の双方に支払った雛人形の購入代金は、総計86円50銭にも達する。このほかにも、さらに雛段上に敷く緋毛氈も予約注文しており、次の通りである。



写真19 一峯の領収証

資料 11 領収証⑥

記

一、金貳拾円四銭壹厘也、別紙の通御掛代金
右之通正に請取申候也

明治廿七年三月八日

田中安居 様

東京本石町三丁目一番地 今井林次郎(印)

資料 12 予約証文

記

金拾四円拾六銭六厘 緋瀧絨、上等、式間幅、壹丈七尺、御雛段掛、裁縫共一切

金五円八拾七銭五厘 同九尺巾、九尺四寸

メ三月十日上り、右之通調達仕候也

三月八日

田中安居 様

今井林次郎

緋毛氈の調達を受注した今井家は、東京日本橋本石町三丁目一番地にあった商家で、玉舟本店と同じ地番の住居表示であるから、その並びに近い至近距離に店を構えていたのであったろう。領収証の宛名の田中安居とは、第6代当主であった田中新十郎信誠の隠居名で、初孫の田鶴の誕生を祝い、祖父が緋毛氈を贈ったものであろう。なお個々の雛人形の収納箱の中には、これら人形商の商標ラベルが貼られているので、参考までにそれも掲げておくことにしよう。この時代の商標ラベルは計4種類を確認することができるが(表4・写真20～23)、いずれも商標マークや人形師名とその印章などが刷られている。千秋齋一峯のラベル①には、人形の宣伝文句として「彫刻精良ニシテ相貌活氣ヲ添装束鮮麗ニシテ形容優美ナリ」とあり、「女兒娛樂ノ間ニ於テ自カラ行儀ヲ辨知シ上ヲ敬スルノ意ヲ悟ラシム誠ニ有益ノ品」であるなどと述べられていることも興味深い。

さて、以上の事実から知れることは第7代当主の長女、田中田鶴の誕生が田中本家にとっていかに重要な出来事であったか、そして1894年(明治27年)におけるその初節供祝が、いかに盛大にいとまされたか、という点に尽きるであろう。多額の費用を投じて、東京日本橋の第一級の人形商から直接、購入された大量の雛人形は、はるばる信州須坂にまで運ばれ、田中本家の収蔵品コレクションを一気に充実させて、そこでの重要な地位を占めることとなった。それは須坂騒動のあおりを受けた後の大きな喪失を、十分に埋め合わせしめる規模での充実・補填となったのであって、今日見ることのできるコレクションの基本と基礎とが、ほぼそこに完成するに至ったともいえるのである。

表4 明治期の雛人形のラベル一覧

区分	業者名	記載	写真
製造業者	①千秋斎一峯	第三回内閣勸業博覧會。東京市日本橋區本石町十軒店雛人形千秋斎一峯(印)。彫刻精良ニシテ相貌活氣ヲ添装束鮮麗ニシテ形容優美ナリ。女兒娛樂ノ間ニ於テ自カラ行儀ヲ辨知シ上ヲ敬スルノ意ヲ悟ラシム誠ニ有益ノ品トス。前記ノ薦告ヲ領シ茲ニ賞牌ヲ授與ス。	20
	②鳳雲齋玉舟	鳳雲齋玉舟(印)	21
	③光玉	光玉(印)	22
	④三越呉服店	三越呉服店	23
販売業者	④三越呉服店	三越呉服店	23



写真20 ラベル①
(一峯)



写真21 ラベル②
(玉舟)



写真22 ラベル③
(光玉)



写真23 ラベル④
(三越呉服店)

3-3 改訂された雛飾図資料

この明治期における雛人形コレクションの充実によって、田中本家の雛段の装飾様式も、大掛かりな改訂がくわえられることとなった。こうして作られた新たな雛飾図が、1894年(明治27年)のそれであって、以下にそれを掲げてみることにしよう(写真24~25・表5)。すでに掲げた1870年(明治3年)時の雛飾図(写真10・表2)と対照させてみれば、その改訂がいかん抜本的なものであったかがよくわかり、田中田鶴の初節供を機に大量の雛人形が新たに購入されたことによる全面的な変更がくわえられた実態を、つぶさに知ることができる。なお翻刻表の方には、この時代の雛人形の一覧表に示した個々の人形の通し番号を、多少の推定を含めつつ表示しておくこととする。

ここに見るように新たに再編成された雛段は、5つに分かれて飾られるようになっており、すでに見た1894年(明治27年)における雛人形の大量購入によって、もはやそうしなければならないまでに、人形の数が一挙に増えている。5つの雛段はそれぞれ、「奥檀」・「添檀之壺」・「添檀之式」・「小人雛棚」・「裸雛」と呼ばれているが、もっとも中心的な位置を占めるものは、もちろん「奥檀」で6段構成となっている。「奥檀」の最上段には一号~三号の3対の大きな内裏雛が並び、誠に壮観であるが、中央の「一号内裏雛(Na 1-1・1-2)」と左手の「三号内裏雛(Na 3-1・3-2)」は玉舟作、右手の「二号内裏雛(Na 2-1・2-2)」は一峯作と決まっていた。これらの内裏雛の背後には、金屏風などを立てず、家紋入りの垂幕を飾るとというのが田中本家の家例であった。

表5 1894年の雛飾図翻刻

(奥壇)

内裡 (No. 3-1・3-2)		内裡 (No. 1-1・1-2)		内裡 (No. 2-1・2-2)	
左大臣 (No. 10-1)	柳原 典侍 (No. 9)	官女三人 (No. 6-1～6-3)	犬曳 官女 (No. 8)	右大臣 (No. 10-2)	
楽太鼓 二人立 (No. 14-1・14-2)	瓢形 徳利 (No. 12-1～12-5)	五人囃子 (No. 12-1～12-5)	瓢形 徳利 (No. 15-1)	高砂 男 (No. 15-1)	高砂 女 (15-2)
三條小鍛 治二人 (No. 18-1・18-2)	勸進帳 三人 (No. 17-1～17-3)	うつぼ 三人立 (No. 16-1～16-3)	末 廣 二人立 (No. 19-1・19-2)		
ほん ぼり (近世No. 3-1～3-5)	古殿様従 者五人立 (近世No. 3-1～3-5)	古和歌 三人立 (No. 35-1・35-2)	古二曲 (No. 35-1・35-2)	石 橋 二人立 (No. 20-1・20-2)	ほん ぼり (No. 20-1・20-2)
小 児 一人立	諸道具類品々		小 児 二人立		

(添壇之壺)

二柱神 (No. 7-1・7-2)		内裡 (No. 5-1・5-2 ?)		神功皇后 (No. 13-1・13-2)	
小徳利 (No. 11-1)	左大臣 (No. 11-1)	五人囃子 (No. 22-1～22-5)	右大臣 (No. 11-2)	小徳利 (No. 11-2)	
布袋	稲荷	勸進帳	花持為朝	飾り馬 (No. 24-1・24-2)	
長顔	業平三人立 (近世No. 5-1～5-3)	菊童子 (近世No. 4)	関兵衛	三条小鍛治	
小児一人立			小児一人立		

(添壇之式)

鬻神		内裡 (近世No. 1-1・1-2 ?)		神功皇后	
三番叟		寿老神	古五人囃子 (近世No. 2-1～2-5)	猩々	
高砂	浦嶋太郎	恵比寿 (No. 40)	金太郎	大黒鼠	高砂

(小人雛棚)

四號内裡 (No. 4-1・4-2)			
随人 (No. 28-1)	官女三人 (No. 27-1 ~ 27-3)	随人 (No. 28-2)	
五人囃子 (No. 29-1 ~ 29.5 ?)			
小人島	軍人二人立	業平東下	福島中佐

(裸雛)

裸雛
同
同

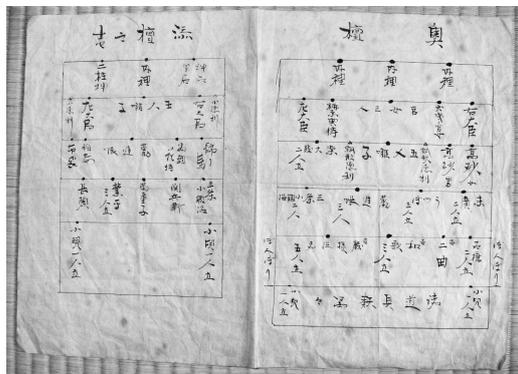


写真24 1894年の雛飾図①

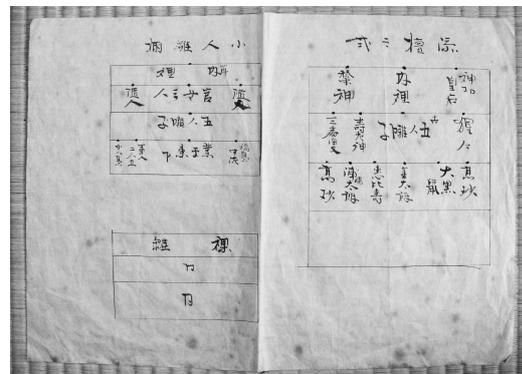


写真25 1894年の雛飾図②

「奥段」の2段目には中央に玉舟作「三人官女 (No. 6-1 ~ 6-3)」を置き、標準的な配置となっているが、その左右に「柳原権典侍 (No. 9)」と「犬(狎)曳官女 (No. 8)」を並べて、官女物の人形ばかりで統一しており、一番外側に左大臣 (No. 10-1)・右大臣 (No. 10-2) の隨身を配して、官女たちを護衛しているかのごとくである。3段目の中央に玉舟作「一号五人囃子 (No. 12-1 ~ 12-5)」を置くのも標準的ではあるが、それを囲んで「瓢形徳利」と「楽太鼓二人立 (No. 14-1・14-2)」・「高砂 (No. 15-1・15-2)」の2人組人形を並べつつ、人数のバランスを取っている。徳利にはおそらく生花を活けたのであろう。4段目は二人立・三人立の組人形のオンパレードで、「三條小鍛冶 (No. 18-1・18-2)」・「弁慶勸進帳 (No. 17-1 ~ 17-3)」・「宇津保 (No. 16-1 ~ 16-3)」・「(能人) 末広二人立 (No. 19-1・19-2)」がずらりと並ぶ。そして5段目には近世期以降の古い人形を並べており、両脇の雪洞にはさまれた中央に、「古殿様従者五人立」とあるのが原舟月作とされる例の「若殿様子供行列 (近世No. ぼんぼり)

3-1～3-5)」である。「古和歌三人立」とはおそらく和歌三神のことで、歌道の守護神とされる柿本人麻呂・山部赤人・衣通姫そとおりひめの三神（もしくは住吉明神・玉津島神・人麻呂の三神）をかたどった人形であったと思われるが、残念なことに現存しない。「古二曲」は現存する「琴と三味線（No. 35-1・35-2）」のことで、「石橋二人立」とは1894年（明治27年）購入の一峯作「能人石橋（No. 20-1・20-2）」のことである。近世期の人形についてのみ、「古〇〇」という言い方をしていることが興味深い。最下段の6段目には、雛道具類をずらりと並べ、両脇に「小児一人立」人形を配置しているが、どのような人形であったのかは、よくわからない。

次の「添檀之壺」は5段構成で、雛段は1段ずつ低くなっていく。最上段の内裏雛は1894年（明治27年）購入の中型内裏雛（No. 5-1・5-2？）と推定されるが、両脇を固める「二柱神（No. 7-1・7-2）」と「神功皇后（No. 13-1・13-2）」との大きさのバランスを配慮すれば、そう考えるのが自然であろう。この最上段は、神話的テーマのもとに統一されていることとなる。2段目の中央には「二号五人囃子（No. 22-1～22-5）」が置かれ、それをはさんで「二号隨身（No. 11-1・11-2）」と小徳利が脇を固めている。3段目には「布袋」・「稲荷」・「勧進帳」・「花持為朝」などといった人形群が登場するが、1894年（明治27年）以前に購入されたものと思われ、「飾り馬（No. 24-1・24-2）」以外は現存しない。4段目の「長顔」・「関兵衛」・「三条小鍛冶」についても同様で、その後の時代に失われてしまったものと推察され、残っているのは「業平三人立」と「菊童子」のみである。いうまでもなく「業平三人立」は近世期の「業平東下り（近世No. 5-1～5-3）」、「菊童子」は「菊慈童（近世No. 4）」のことである。1894年（明治27年）以前の段階においても、さまざまな人形類がかつて存在したことがわかるわけである。

その次の「添檀之式」の場合は4段構成の雛段で、やはり古い人形類がここに集められているが、最上段中央の内裏雛がどの人形を指すものなのかは判然としない。「蠶神」・「神功皇后」はすでになく、2段目の「三番叟」・「寿老神」・「狸々」などもまた現存しない。残っているのは、「古五人囃子」とある近世期の「五人囃子（近世No. 2-1～2-5）」のみであった。3段目の「高砂」・「浦嶋太郎」・「金太郎」・「大黒鼠」もまた今はなく、あるのは「恵比寿（No. 40）」のみとなっている。明治期にはこのように、人形の入れ替わりがさかんに見られたというのが実情なのであって、いかなる事情によるものなのかは、今となっては知るよしもない。さらにその次の「小人雛棚」は、やはり4段構成の雛段となっているが、その名の通り芥子雛のみを集めたミニチュア雛段となっていて、最上段の主人公に「四号内裏雛（No. 4-1・4-2）」が収まっている以外は、すべて小型雛で固められており、2段目の「随人」は「小型隨身（No. 28-1・28-2）」のことで、「官女三人」は「一号小型官女（No. 27-1～27-3）」のことで、いずれも現存する。3段目の「五人囃子」は、「一号小型五人囃子（No. 29-1～29-5）」のことであったろう。さて、最後の「裸雛」は3段構成となっており、裸雛すなわち着せ替え人形としての市松人形が並べられ、女兒らがそれらを手に取って、手作りの衣裳を着せて遊んだものと思われる。以上の5つの雛段飾りは、1894年（明治27年）における田中田鶴の初節供祝を機に定められたものなのであったが、その57年後にあたる1951年（昭和26年）に、現当主夫人となる田中洋子氏の初節供祝の際に、この雛飾図をもとにしてそれが忠実に再現されるに至ったということも（写真1）、すでに述べた。それは今日の田中本家博物館の展示においても、踏襲されているのである。

4 大正期の雛人形

4-1 大正期の雛人形の特徴

大正期の雛人形は田中本家の人形コレクションの中で最大の数量を持っており、総計56点122体を数えるが(表6)、全体が大きく二群に分かれるのであって、ひとつが田中本家の直属コレクション(No.1～31)、もうひとつは親類筋にあたる鈴木家のコレクション(No.32～56)である。計31点70体を数える前者をここでは「田中本家群」、計25点52体を数える後者を「鈴木家群」と呼ぶことにしよう。双方に属するすべての人形の購入年が判明しており、田中本家群は1917年(大正6年)、鈴木家群は1925年(大正15年)となっていて、その寄贈者もすべてわかっており、表中に見る通りである。田中本家群の人形類は田中本家の第9代当主であった田中新十郎三次の長女、田中ちよふの初節供にかかわる祝品がそのすべてを占めており、同女はその前年の1916年(大正5年)に出生していて、翌1917年(同6年)4月に初節供祝がなされることとなった。田中ちよふの生母は10代当主となった田中田鶴であって、すでに見た1894年(明治27年)における初節供祝の主人公なのであったから、田鶴・ちよふの2代にわたる女兒誕生を通じて、田中本家の膨大な雛人形のコレクションの中軸が形成されてきたということになる。一方、鈴木家群のコレクションは、その田中田鶴の妹であった田中薫の嫁ぎ先に、もともと帰属していたものなのであって、後年にそれが田中本家に引き取られることとなったため、今それが田中本家に所蔵されている。田中本家の第6代当主であった田中新十郎信誠の妻、田中ひでの実家に跡取りがなくて絶家することとなり、1899年(明治32年)に生まれた田中薫がその名跡を継承することとなったので、薫は鈴木姓を名乗ることとなったのである。田中ひでは田鶴・薫姉妹の祖母にあたる。かくして鈴木(旧姓田中)薫は、嫁ぎ先において3女をもうけることとなったが、1925年(大正15年)におけるその長女の初節供祝に贈られた多数の雛人形群が今、田中本家にあるということになる。鈴木家はその後、絶えてしまったので、人形群は薫の実家に引き取られたというわけなのである。以上のような経緯によって、田中本家・鈴木家の両家の雛人形がここに集められたこととなり、コレクションは一層の充実をみたわけで、大正期におけるその形態的な特色や流行の実態が、余すところなく保存されたことは、誠に素晴らしい。

これら大正期の雛人形は前述した通り、そのすべての購入者・寄贈者名が判明しているのであるが、そこからわかる重要な事実、田中本家・鈴木家という当事家自身によって購入された雛人形が、ただのひとつもないということである。すべての雛人形は、両家ゆかりの親戚筋・本家分家・出入り職人家などが自ら購入して、当事家へ贈っているのであって、明治期の場合とはまったく事情を異にしている。雛人形は自家で買うものではなく、ゆかりの家々から贈られてくるものとなった、といってもよいことであろう。田中本家群について見てみると、計30名の人々が田中本家へ人形を贈っており、その顔ぶれを見ると、そのほとんどは分家筋や使用人家、出入り職人家などであって、娘の嫁ぎ先家なども一部見られる。大工・髪結・瓦屋などあるのは出入りの使用人家で、時計屋などあるのは分家筋であった。身内親族の田中邦治家に連なるゆかりの人々の名も多く見られるが、田中邦治は第11代当主、田中太郎の後見人であって、太郎の父親で第9代当主であった田中三次が早世したために、太郎の父親がわりになった人物であり、後に衆議院議員や須坂市長を

つとめた地域のリーダーでもあった。なお、田中本家と出入り職人たちとの間には強い信頼関係があり、次のような状況であったという。

田中家は戦前、六百以上もの長屋・家作を所有していたから、屋敷や家作の営繕・普請のために毎日職人が出入りしていた。大工、左官・とび職、建具職、瓦職なのである。彼らの仕事場として屋敷内に「細工場^{さいくぼ}」があり、つねにかなづちやのみの音が響いていた。細工場には炉がかけられ、職人はそこで休憩をとる。棟梁だけは、奥のお茶の間に上がる。ぴっちりした作業用の股引のため正座しにくい、棟梁は威儀を正して常に正座してお茶をいただいた。職人は田中本家の出入り職人として誇りを持って働き、本職の仕事以外でも田中家に事あれば駆けつけて手伝った。その気風は現在に至るまで受け継がれ、「田本会^{たほんかい}」という出入り職人の会が作られている。昭和五十一年の現在の本宅の建築も、博物館化に伴う改築・補修も田本会でなければできない仕事である。本宅新築の際の棟上げ式では、地鎮祭の鬼門柱を棟梁の家に送る棟梁送りの儀式を行った。田中本家のそろいのハッピーを着た職人たちが、古式にのっとり列を進めるさまは、田本（田中本家）を守って行こうとする気概にあふれ、職人氣質の粋を見るようだったという [平尾,1994:pp.90-91]。

このようなわけであったから、職人たちは進んで田中本家に雛人形を贈り、初節供祝に花を添えようとしたのであったろう。ここにある「田本会」は今もあり、田中本家の伝統文化を支える大きな力となっている [市川,1994:p.22]。

大正期にはまた、当地方にも在地の雛人形商が現われるようになり、今までのように東京にまで出向いて人形を買いつけるということをしなくても、誰でも地元で東京産の雛人形を購入できるようになって、初節供に雛を贈るという習慣も広く普及・定着していったものと思われる。身内親族や出入り職人らが田中本家に贈るための雛人形を調達する際に、特に重要な役割を果たしたのが長野市内にあった人形商「中越屋^{なかごえや}」で、表6を見ればわかるように、計15点31体もの人形が中越屋から購入され、田中本家へ贈られている。それらの雛人形はほとんど東照斎明月作となっていることから、中越屋ではもっぱら東京日本橋十軒店の明月から人形を仕入れていたこともわかる。中越屋は善光寺門前の西後町にあった近世後期創業という老舗商家で、創業当初は漆器商をいとなんでいた。1912年（明治45年）版『長野市街明細図』を見ると善光寺参道左側、長野郵便局の北隣に「中越塗物店」の名が記されており、1917年（大正6年）版『長野市街明細図（報知新聞新年付録）』や、1920年（大正9年）版『長野市街地図（同）』などには「中越屋漆器店」と記されている。1927年（昭和2年）版『長野商工人名録』には「塗物商中越屋（店主甘利藤次郎）」と出ており [長野商業会議所（編）,1927:p.4]、この頃から「漆器家具・箆筒・長持・鏡台類・和洋家具製作請負、三五月節句品」などを手広く販売するようになった [DEN企画工房（編）,2002:p.137]。鈴木家群の中には、田中本家から贈られた内裏雛が1点含まれているが（No.54-1・54-2）、これも中越屋から求めたものなのであった。大正期にはさらに、須坂市内にも「山野屋商店」・「提灯屋」などの屋号で、東京から仕入れた雛人形を販売する商家が現われているが、中越屋と同様、副業的に三月・五月人形や羽子板などの季節の際物を扱っていたという。田中本家・鈴木家の雛人形コレクション中にも、それら地元店からの購入品が含まれているかも知れないが、ラベルや箱書などからそれを確認することはできない。

表6 大正期の雛人形一覽

No.	名称	計測値	寄贈時	寄贈者	人形の製造者	販売者	箱書・その他	写真
1-1	紫宸殿	830	1917	田中新之助	鳳雲齋玉舟 (東京日本橋)		紫宸殿, 大正六年四月田中新之助より祝品, この箱よこにすべからず, ラベル⑤	26
1-2	紫宸殿内裏雛 (男雛)	130	1917	田中新之助	鳳雲齋玉舟 (東京日本橋)		紫宸殿附属内裏様, 大正六年四月祝品, 舁新ヨリ附属ス	26・ 27
1-3	紫宸殿内裏雛 (女雛)	130	1917	田中新之助	鳳雲齋玉舟 (東京日本橋)		紫宸殿附属内裏様, 大正六年四月祝品, 舁新ヨリ附属ス	26・ 27
2-1	紫宸殿三人官女 (提銚子)	140	1917	田中新之助	鳳雲齋玉舟 (東京日本橋)		内裏様の御道具在中	26・ 27
2-2	紫宸殿三人官女 (島台)	90	1917	田中新之助	鳳雲齋玉舟 (東京日本橋)		内裏様の御道具在中	26・ 27
2-3	紫宸殿三人官女 (長柄銚子)	140	1917	田中新之助	鳳雲齋玉舟 (東京日本橋)		内裏様の御道具在中	26・ 27
3-1	紫宸殿五人囃子 (平太鼓)	80	1917	田中新之助	鳳雲齋玉舟 (東京日本橋)		紫宸殿附属品五人囃子官女在中, 大正六年四月祝品舁新ヨリ附属ス, ラベル⑤	26・ 27
3-2	紫宸殿五人囃子 (大皮鼓)	110	1917	田中新之助	鳳雲齋玉舟 (東京日本橋)		紫宸殿附属品五人囃子官女在中, 大正六年四月祝品舁新ヨリ附属ス, ラベル⑤	26・ 27
3-3	紫宸殿五人囃子 (小鼓)	110	1917	田中新之助	鳳雲齋玉舟 (東京日本橋)		紫宸殿附属品五人囃子官女在中, 大正六年四月祝品舁新ヨリ附属ス, ラベル⑤	26・ 27
3-4	紫宸殿五人囃子 (笛)	80	1917	田中新之助	鳳雲齋玉舟 (東京日本橋)		紫宸殿附属品五人囃子官女在中, 大正六年四月祝品舁新ヨリ附属ス, ラベル⑤	26・ 27
3-5	紫宸殿五人囃子 (謡)	80	1917	田中新之助	鳳雲齋玉舟 (東京日本橋)		紫宸殿附属品五人囃子官女在中, 大正六年四月祝品舁新ヨリ附属ス, ラベル⑤	26・ 27
4-1	紫宸殿右近之桜	250	1917	田中新之助	東光齋玉翁		紫宸殿附属品右近之桜左近之橘, 大正六年四月田中新之助ヨリ祝品ニテ附属ス, ラベル⑥	
4-2	紫宸殿左近之橘	250	1917	田中新之助	東光齋玉翁		紫宸殿附属品右近之桜左近之橘, 大正六年四月田中新之助ヨリ祝品ニテ附属ス, ラベル⑥	
5-1	豆内裏雛(男雛)	100	1917	田中文平(邦治父)			豆内裡, 田中文平	
5-2	豆内裏雛(女雛)	100	1917	田中文平(邦治父)			豆内裡, 田中文平	
6-1	官女三人立 (提銚子)	150	1917	田中八之助 (時計屋)			官女三人立, 大正六年四月祝品田中八之助ヨリ	
6-2	官女三人立 (島台)	100	1917	田中八之助 (時計屋)			官女三人立, 大正六年四月祝品田中八之助ヨリ	
6-3	官女三人立 (長柄銚子)	150	1917	田中八之助 (時計屋)			官女三人立, 大正六年四月祝品田中八之助ヨリ	
7	狎曳官女	140	1917	赤田正治 (邦治義弟)	東照齋明月(東京 日本橋十軒店)	中越屋 (長野)	狎引官女, 大正六年四月, 祝品赤田正治ヨリ, ラベル⑦・⑱	28
8-1	五人囃子 (平太鼓)	100	1917	田中橋蔵 ・田中信吉			五人囃子, 大正六年四月, 祝品田中橋蔵・田中信吉ヨリ	
8-2	五人囃子 (大皮鼓)	130	1917	田中橋蔵 ・田中信吉			五人囃子, 大正六年四月, 祝品田中橋蔵・田中信吉ヨリ	
8-3	五人囃子 (小鼓)	130	1917	田中橋蔵 ・田中信吉			五人囃子, 大正六年四月, 祝品田中橋蔵・田中信吉ヨリ	
8-4	五人囃子 (笛)	100	1917	田中橋蔵 ・田中信吉			五人囃子, 大正六年四月, 祝品田中橋蔵・田中信吉ヨリ	
8-5	五人囃子 (謡)	100	1917	田中橋蔵 ・田中信吉			五人囃子, 大正六年四月, 祝品田中橋蔵・田中信吉ヨリ	
9	花車官女	130	1917	三田幸司(三次兄)	鳳雲齋玉舟(東京 日本橋)		花車, 大正六年四月, 祝品三田幸司ヨリ, ラベル⑤	
10-1	和歌三神 (住吉)	140	1917	三田幸司(三次兄)			和歌三神, 大正六年四月, 祝品三田幸司	
10-2	和歌三神 (玉津島)	200	1917	三田幸司(三次兄)			和歌三神, 大正六年四月, 祝品三田幸司	
10-3	和歌三神 (人麻呂)	140	1917	三田幸司(三次兄)			和歌三神, 大正六年四月, 祝品三田幸司	
11-1	鶴亀(鶴)	190	1917	清水伊作 (松ヶ枝)	東照齋明月(東京 日本橋十軒店)	中越屋 (長野)	鶴亀, 大正六年四月, 祝品清水伊作, ラベル⑦・⑱	

11-2	鶴亀(亀)	190	1917	清水伊作 (松ヶ枝)	東照齋明月(東京 日本橋十軒店)	中越屋 (長野)	鶴亀, 大正六年四月, 祝品清水伊作ら, ラベル⑦・⑱	
12	敦盛青葉之笛	260	1917	霜田元之助			敦盛青葉之笛, 大正六年四月, 祝品霜田 元之助ヨリ	
13-1	荒木又右衛門柳 生宝生試合 (荒木又右衛門)	180	1917	番場金之助 (大工)			荒木又右衛門・柳生宝生試合, 大正六年 四月, 祝品番場金之助	
13-2	荒木又右衛門柳 生宝生試合 (柳生宝生)	150	1917	番場金之助 (大工)			荒木又右衛門・柳生宝生試合, 大正六年 四月, 祝品番場金之助	
14-1	末広(主人)	200	1917	中俣龍太郎 ・鈴木信太郎	三越呉服店(東 京日本橋)		大正六年四月, 祝品中俣龍太郎・鈴木信 太郎ヨリ, ラベル⑩	
14-2	末広(太郎冠者)	170	1917	中俣龍太郎 ・鈴木信太郎	三越呉服店(東 京日本橋)		大正六年四月, 祝品中俣龍太郎・鈴木信 太郎ヨリ, ラベル⑩	
15-1	塚原卜伝・宮本 武蔵試合 (塚原卜伝)	150	1917	北沢千代 (髪結)	鳳雲齋玉舟(東京 日本橋)		塚原卜伝・宮本六三四試合, 大正六年四月, 祝品北沢千代ヨリ, ラベル⑤	29
15-2	塚原卜伝・宮本 武蔵試合 (宮本武蔵)	170	1917	北沢千代 (髪結)	鳳雲齋玉舟(東京 日本橋)		塚原卜伝・宮本六三四試合, 大正六年四月, 祝品北沢千代ヨリ, ラベル⑤	29
16-1	当世美人(右)	350	1917	町田歌吉 (八町)			当世美人, 大正六年四月, 祝品町田歌吉ヨ リ	
16-2	当世美人(左)	350	1917	町田歌吉 (八町)			当世美人, 大正六年四月, 祝品町田歌吉ヨ リ	
17-1	関の戸(右)	150	1917	相沢通蔵	東照齋明月(東京 日本橋十軒店)	中越屋 (長野)	関の戸, 大正六年四月, 祝品相沢通蔵, ラベル⑦・⑱	
17-2	関の戸(左)	150	1917	相沢通蔵	東照齋明月(東京 日本橋十軒店)	中越屋 (長野)	関の戸, 大正六年四月, 祝品相沢通蔵, ラベル⑦・⑱	
18	小野道風	200	1917	森山関太郎 (瓦屋)	吉磯		小野道風, 大正六年四月, 祝品森関太郎 ヨリ, ラベル⑪	30
19	静御前	150	1917	原田寅吉 (大工)	吉磯		静御前, 大正六年四月, 祝品原田寅吉, ラ ベル⑪	
20	三番叟	180	1917	松野 盛 (親戚)	東照齋明月(東京 日本橋十軒店)	中越屋 (長野)	三番叟, 大正六年四月, 祝品松野盛ヨリ, ラベル⑦・⑱	
21-1	鬼一法眼三略之 巻(右)	160	1917	田中 波 (邦治妹)		中越屋 (長野)	鬼一法眼三略之巻, 大正六年四月, 祝品田 中波ヨリ, ラベル 21	
21-2	鬼一法眼三略之 巻(左)	120	1917	田中 波 (邦治妹)		中越屋 (長野)	鬼一法眼三略之巻, 大正六年四月, 祝品田 中波ヨリ, ラベル 21	
22-1	二人小町(右)	170	1917	田中信及 (同族)	東照齋明月(東京 日本橋十軒店)		二人小町, 大正六年四月, 祝品田中信及ヨ リ, ラベル⑦	
22-2	二人小町(左)	170	1917	田中信及 (同族)	東照齋明月(東京 日本橋十軒店)		二人小町, 大正六年四月, 祝品田中信及ヨ リ, ラベル⑦	
23-1	恵比須漫才(右)	150	1917	田中次郎兵 衛・瀬兵衛			恵比寿万才, 大正六年四月, 祝品田中次 郎兵衛・田中瀬兵衛	
23-2	恵比須漫才(左)	150	1917	田中次郎兵 衛・瀬兵衛			恵比寿万才, 大正六年四月, 祝品田中次 郎兵衛・田中瀬兵衛	
24-1	勧進帳(富樫)	160	1917	田中庫太 (邦治弟)			勧進帳, 大正六年四月, 祝品田中庫太ヨリ	
24-2	勧進帳(弁慶)	160	1917	田中庫太 (邦治弟)			勧進帳, 大正六年四月, 祝品田中庫太ヨリ	
24-3	勧進帳(義経)	140	1917	田中庫太 (邦治弟)			勧進帳, 大正六年四月, 祝品田中庫太ヨリ	
25-1	高砂(尉)	170	1917	田中祐治	東照齋明月(東京 日本橋十軒店)	中越屋 (長野)	高砂, 大正六年四月, 祝品田中祐治ヨリ, ラベル⑦・⑱	
25-2	高砂(姥)	110	1917	田中祐治	東照齋明月(東京 日本橋十軒店)	中越屋 (長野)	高砂, 大正六年四月, 祝品田中祐治ヨリ, ラベル⑦・⑱	
26-1	高砂(尉)	160	1917	小山たつ			高砂, 大正六年四月, 祝品小山たつヨリ	
26-2	高砂(姥)	160	1917	小山たつ			高砂, 大正六年四月, 祝品小山たつヨリ	
27-1	高砂(尉)	150	1917	田中とみ			高砂, 大正六年四月, 祝品田中とみヨリ	
27-2	高砂(姥)	150	1917	田中とみ			高砂, 大正六年四月, 祝品田中とみヨリ	
28-1	高砂(尉)	150	1917	塚田玉五郎			高砂, 大正六年四月, 祝品塚田玉五郎ヨリ	
28-2	高砂(姥)	150	1917	塚田玉五郎			高砂, 大正六年四月, 祝品塚田玉五郎ヨリ	

29-1	神功皇后(皇后)	190	1917	伊奈熊蔵	吉磯		神宮皇后・神后皇宮, 大正六年四月, 祝品伊奈熊蔵ヨリ, ラベル⑪
29-2	神功皇后(竹内宿禰)	120	1917	伊奈熊蔵	吉磯		神宮皇后・神后皇宮, 大正六年四月, 祝品伊奈熊蔵ヨリ, ラベル⑪
30-1	大久保彦左衛門(右)	230	1917	中沢類之助			
30-2	大久保彦左衛門(中)	230	1917	中沢類之助			
30-3	大久保彦左衛門(左)	230	1917	中沢類之助			
31-1	二十四孝八重垣姫(左端)	160	1917	一志茂美			
31-2	二十四孝八重垣姫(中左)	160	1917	一志茂美			
31-3	二十四孝八重垣姫(中右)	160	1917	一志茂美			
31-4	二十四孝八重垣姫(右端)	110	1917	一志茂美			
32-1	一号内裏雛(男雛)	100	1925	宮下友雄	東照斎明月(東京日本橋十軒店)		内裡, 大正六年四月, 祝品宮下友雄, ラベル⑨
32-2	一号内裏雛(女雛)	100	1925	宮下友雄	東照斎明月(東京日本橋十軒店)		内裡, 大正六年四月, 祝品宮下友雄, ラベル⑨
33-1	一号三人官女(提銚子)	150	1925	原田慶次郎	東照斎明月(東京日本橋十軒店)	中越屋(長野)	官女, 大正十五年四月, 祝品原田慶次郎, ラベル⑨・⑳
33-2	一号三人官女(島台)	100	1925	原田慶次郎	東照斎明月(東京日本橋十軒店)	中越屋(長野)	官女, 大正十五年四月, 祝品原田慶次郎, ラベル⑨・⑳
33-3	一号三人官女(長柄銚子)	150	1925	原田慶次郎	東照斎明月(東京日本橋十軒店)	中越屋(長野)	官女, 大正十五年四月, 祝品原田慶次郎, ラベル⑨・⑳
34	官女狎曳	240	1925	田中蔵造			官女狎曳, 大正十五年四月, 祝品田中蔵造
35-1	二号三人官女(提銚子)	105	1925	田中八之助			官女, 大正十五年四月, 祝品田中八之助
35-2	二号三人官女(島台)	75	1925	田中八之助			官女, 大正十五年四月, 祝品田中八之助
35-3	二号三人官女(長柄銚子)	105	1925	田中八之助			官女, 大正十五年四月, 祝品田中八之助
36-1	五人囃子(平太鼓)	95	1925	田中邦治	東雲斎新月	中越屋(長野)	五人囃子, 大正十五年四月, 祝品田中邦治, ラベル⑫
36-2	五人囃子(大皮鼓)	130	1925	田中邦治	東雲斎新月	中越屋(長野)	五人囃子, 大正十五年四月, 祝品田中邦治, ラベル⑫
36-3	五人囃子(小鼓)	130	1925	田中邦治	東雲斎新月	中越屋(長野)	五人囃子, 大正十五年四月, 祝品田中邦治, ラベル⑫
36-4	五人囃子(笛)	95	1925	田中邦治	東雲斎新月	中越屋(長野)	五人囃子, 大正十五年四月, 祝品田中邦治, ラベル⑫
36-5	五人囃子(謡)	95	1925	田中邦治	東雲斎新月	中越屋(長野)	五人囃子, 大正十五年四月, 祝品田中邦治, ラベル⑫
37-1	一号隨身(左大臣)	130	1925	田中俊之助	玉寿		隨身壺対, 大正十五年四月, 祝品田中俊之助, ラベル⑬
37-2	一号隨身(右大臣)	130	1925	田中俊之助	玉寿		隨身壺対, 大正十五年四月, 祝品田中俊之助, ラベル⑬
38-1	二号隨身(左大臣)	160	1925	田中橘蔵・田中信吉		中越屋(長野)	隨身, 大正十五年四月, 祝品田中橘蔵・田中信吉, ラベル⑳
38-2	二号隨身(右大臣)	160	1925	田中橘蔵・田中信吉		中越屋(長野)	隨身, 大正十五年四月, 祝品田中橘蔵・田中信吉, ラベル⑳
39-1	仕丁三人(台笠)	100	1925	田中本家	東照斎明月(東京日本橋十軒店)	中越屋(長野)	仕丁三人, 大正十五年四月, 祝品本家, ラベル⑧・㉑
39-2	仕丁三人(沓台)	100	1925	田中本家	東照斎明月(東京日本橋十軒店)	中越屋(長野)	仕丁三人, 大正十五年四月, 祝品本家, ラベル⑧・㉑
39-3	仕丁三人(立傘)	100	1925	田中本家	東照斎明月(東京日本橋十軒店)	中越屋(長野)	仕丁三人, 大正十五年四月, 祝品本家, ラベル⑧・㉑
40	一号花車官女	130	1925	山崎芳郎	香月		花車官女, 大正十五年四月, 祝品山崎芳郎, ラベル⑭
41	二号花車官女	130	1925	伊藤きく			花車官女, 大正十五年四月, 祝品伊藤きく

42	三号花車官女	130	1925	番場金五郎・ 宮腰捨藏	香月		花車官女, 大正十五年四月, 祝品番場金 五郎・宮腰捨藏, ラベル⑭	
43-1	一号胡蝶ノ舞 (右)	110	1925	望月なみ	香月		胡蝶ノ舞, 大正十五年四月, 祝品望月なみ, ラベル⑭	31
43-2	一号胡蝶ノ舞 (左)	150	1925	望月なみ	香月		胡蝶ノ舞, 大正十五年四月, 祝品望月なみ, ラベル⑭	31
44-1	二号胡蝶ノ舞 (右)	120	1925	高橋忠治 ・中俣道治	愛林堂観月		胡蝶ノ舞, 大正十五年四月, 祝品高橋忠治・ 中俣道治, ラベル⑮	
44-2	二号胡蝶ノ舞 (左)	150	1925	高橋忠治 ・中俣道治	愛林堂観月		胡蝶ノ舞, 大正十五年四月, 祝品高橋忠治・ 中俣道治, ラベル⑮	
45-1	三号胡蝶ノ舞 (右)	150	1925	清水伊作		中越屋 (長野)	大正十五年四月, 祝品清水伊作, ラベル⑳	
45-2	三号胡蝶ノ舞 (左)	190	1925	清水伊作		中越屋 (長野)	大正十五年四月, 祝品清水伊作, ラベル⑳	
46-1	羽衣(天女)	145	1925	田中瀬兵衛	天明斎昇月		羽衣, 大正十五年四月, 祝品田中瀬兵衛, ラベル⑯	
46-2	羽衣(男)	140	1925	田中瀬兵衛	天明斎昇月		羽衣, 大正十五年四月, 祝品田中瀬兵衛, ラベル⑯	
47-1	羽衣舞(天女)	150	1925	田中駒治	愛林堂観月		羽衣舞, 大正十五年四月, 祝品田中駒治, ラベル⑮	
47-2	羽衣舞(男)	120	1925	田中駒治	愛林堂観月		羽衣舞, 大正十五年四月, 祝品田中駒治, ラベル⑮	
48-1	小鍛冶(鍛冶屋)	110	1925	赤田きそ	香月		小鍛冶, 大正十五年四月, 祝品赤田きそ, ラベル⑭	32
48-2	小鍛冶(稲荷神)	150	1925	赤田きそ	香月		小鍛冶, 大正十五年四月, 祝品赤田きそ, ラベル⑭	32
49-1	太田道灌(道灌)	150	1925	中沢類之助	香月		太田道灌, 大正十五年四月, 祝品中沢類 之助, ラベル⑭	
49-2	太田道灌(娘)	110	1925	中沢類之助	香月		太田道灌, 大正十五年四月, 祝品中沢類 之助, ラベル⑭	
50-1	高砂(尉)	145	1925	相沢伝蔵		中越屋 (長野)	高砂, 大正十五年四月, 祝品相沢伝蔵, ラ ベル⑳	
50-2	高砂(姥)	140	1925	相沢伝蔵		中越屋 (長野)	高砂, 大正十五年四月, 祝品相沢伝蔵, ラ ベル⑳	
51-1	花咲翁(武士)	160	1925	牧 寅助			花咲翁, 大正十五年四月, 祝品牧寅助	
51-2	花咲翁(爺)	130	1925	牧 寅助			花咲翁, 大正十五年四月, 祝品牧寅助	
52-1	鶴亀舞(鶴)	150	1925	田中庫太	幸月		鶴亀舞, 大正十五年四月, 祝品田中庫太, ラベル⑰	
52-2	鶴亀舞(亀)	110	1925	田中庫太	幸月		鶴亀舞, 大正十五年四月, 祝品田中庫太, ラベル⑰	
53-1	獅子舞(右)	150	1925	北沢きん			獅子舞, 大正十五年四月, 祝品北澤きん	
53-2	獅子舞(左)	120	1925	北沢きん			獅子舞, 大正十五年四月, 祝品北澤きん	
54-1	無銘(右)	110	1925	光永留松			大正十五年四月, 祝品光永留松	
54-2	無銘(左)	100	1925	光永留松			大正十五年四月, 祝品光永留松	
55-1	無銘(右)	110	1925	宮沢ゆき	東照斎明月(東京 日本橋十軒店)		大正十五年四月, 祝品宮沢ゆき, ラベル⑧	
55-2	無銘(左)	110	1925	宮沢ゆき	東照斎明月(東京 日本橋十軒店)		大正十五年四月, 祝品宮沢ゆき, ラベル⑧	
56-1	二号内裏雛 (男雛)		1925	田中本家	東照斎明月(東京 日本橋十軒店)	中越屋 (長野)	内裡, 大正十五年四月, 祝品本家, ラベル⑦・ ⑳	
56-2	二号内裏雛 (女雛)		1925	田中本家	東照斎明月(東京 日本橋十軒店)	中越屋 (長野)	内裡, 大正十五年四月, 祝品本家, ラベル⑦・ ⑳	

注)計測値は台座を含めない全高で表示し,単位はmm。No30-1~3・31-1~4は今回の調査で確認することができなかったが,田中本家博物館の収藏品台帳に記載されているので収録しておいた。

4-2 形態面から見た特徴

大正期の雛人形を、その種類や形態の面から注目してみると、明治期のものには見られなかった諸特徴もいくつか指摘することができる。まずいえることは、個々の人形のサイズが顕著に小型化しているということで、たとえば内裏雛のみを取り上げて比較してみても、明治期のものはいずれも全高が20cm台に達するのに対して大正期のそれは10cm台にとどまっている。三人官女・五人囃子・隨身やその他の組人形を見ても、ほとんどが10cm台となっていて、いわゆる4寸人形のサイズのものが多い。昭和・平成期のものと変わらないわけで、人形サイズの現代化は大正期にすでに始まっていたということになる。それに対して明治期のものは、まだ近世期の伝統を引きずっていたといもいえるであろう。人形の種類の面からみると、一層の多様化の傾向が逆に見られ、これも大正期の特色といえよう。「敦盛青葉之笛 (No. 12)」・「荒木又右衛門・柳生宝生試合 (No. 13-1・13-2)」・「塚原ト伝・宮本武蔵試合 (No. 15-1・15-2・写真 29)」・「太田道灌 (No. 49-1・49-2)」などの武家物が登場するというのも、この時期の流行を示すものなのかも知れないが、現代の感覚からすれば女兒の祝に、あまりふさわしい題材とはいえないことであろう。「高砂」が多くみられるというのもこの時代の特色で、計5点10体を確認することが出来る (No. 25-1～2・26-1～2・27-1～2・28-1～2・50-1～2)。相生の松の精である尉と姥とが高砂の浜を清めているという決まりきったシーンが描かれているが、もともとは能の物語であって、能・謡曲・狂言物の題材はあいかわらず多い。「鶴亀 (No. 11-1・11-2)」・「敦盛青葉之笛 (No. 12)」・「末広 (No. 14-1・14-2)」・「関の戸 (No. 17-1・17-2)」・「羽衣 (No. 46-1・46-2)」・「小鍛冶 (No. 48-1・48-2・写真 32)」なども、これに並ぶものであったろう。「勸進帳 (No. 24-1～24-3)」は歌舞伎から、「鬼一法眼三略之巻 (No. 21-1・21-2)」は浄瑠璃から、「胡蝶ノ舞 (No. 43-1～45-2・写真 31)」は雅楽から、「花咲翁 (No. 51-1・51-2)」は昔話から、「神功皇后 (No. 29-1・29-2)」は神話から題材を得ている。特に「胡蝶ノ舞」は3点6体が見られ、やはりこの時代の流行であったろう。「狛曳官女 (No. 7・写真 28)・官女狛曳 (No. 34)」といった明治期以来のなじみの組人形もまた見られ、犬の狛が非常に写實的に作られるようになってくる。「和歌三神 (No. 10-1～10-3)」は近世期以来から見られる古い題材であるが、通常は柿本人麻呂・山部赤人・衣通姫そとおりひめの三神で表される和歌の守護神が、ここでは住吉明神・玉津島神・人麻呂の三神という構成になっていることが興味深い。「小野道風 (No. 18・写真 30)」なども、大変すぐれた人形作品といえる。

ところで大正期の雛人形の中で、ひときわ目を見張る中心的な存在で、特に注目されるものとしては「紫宸殿 (No. 1-1・写真 26～27)」があげられることであろう。これは、いわゆる「御殿雛」と呼ばれるもので、京都御所の紫宸殿を模した立派な屋形の中にいくつかの雛人形を並べて配置したもので、明治時代末期から大正時代初期にかけて全国的に大流行の動きを見せ、各地にそれが残っている。紫宸殿雛の流行については、次に引用する1911年(明治44年)の『風俗画報』の記録が、参考になるであろう。そこには「天下一品の雛」として、紫宸殿雛のことが次のように述べられている。

三月節句前某好事家よりの注文にて、三越呉服店が制作に従事し居れりと云ふ雛は、僅か三尺四方程の平面に京間一寸八分の割合にて總檜造りの紫宸殿を正面に置き、之に續きて、別殿二箇及び舞殿を設け、其中種々の木彫の雛人形二十餘箇を置き古代の儀式に模したる種々の道



写真26 紫宸殿 (No.1-1)



写真27 紫宸殿の内裏・三人官女・五人囃子
(No.1-1~2・2-1~3・3-1~5)



写真28 狛曳官女 (No.7)



写真29 塚原卜伝・宮本武蔵試合 (No.15-1・15-2)



写真30 小野道風 (No.18)



写真31 胡蝶の舞 (No.43-1・43-2)



写真32 小鍛冶 (No.48-1・48-2)

具五十餘種を配する趣向なるが人形の大きさ立てる者にて僅に一寸二分と云ふ小き物なれば、其調度の如きも之に準じて小さく、机の上に載する硯箱の如きは豆の如き物なれど、其中には硯墨杯も納めあり。諸事費用を惜まず製作せしめ居り、形は小なれど人形調度總て極彩色を施しあり、出来の上は實に天下一品の珍なるべしと〔東陽堂(編),1911:p.23〕。

これによると、東京日本橋の三越呉服店が同年に売り出した紫宸殿雛は、3尺四方の平面に総枠造りの紫宸殿1棟と付属舞殿2棟を設け、それらの内部に1寸2分の小人形を20点余、雛道具類を50点余も並べ、きわめて精巧な造りのミニチュア細工であったらしい。価格も相当に高価なものであったに違いないが、このような新機軸の雛人形を次々と売り出しては、流行の発信基地としての役割を果たしていた三越呉服店の、確固たる存在がよく知られることでもあったろう。同じ日本橋の地で、十軒店の雛市はすでに廃れて久しいとはいえ、人形師らがまだそこで営業を続けてはいたが、隣接の三越が近代商法をもって大々的に雛人形の大量販売を始め、流行の最先端を走って業界にも多大な影響を与えていたのであった。今、各地に残っている、いわゆる御殿雛というものは、この三越型の紫宸殿雛をモデルとしてそれを簡素化し、廉価生産されたものなのかも知れず、その多くは1棟の御殿の中に内裏雛1対のみ、あるいはそこに三人官女をくわえたものといった形式が一般的なものであって、多数の雛道具類が付属するような形のもので、筆者は各地の民俗調査を通じても、いまだに一例も見ることがない。震災・戦災を経た後の東京都市圏にあって三越の売り出した初期型の紫宸殿雛は、いまやまったく残っていないのかも知れない。

田中本家の紫宸殿雛は、あえてそうしたミニチュア細工化への方向を選ばず、人形の数を絞って単体人形並みの有職装飾に力点を置いたものなのであって、いわゆる御殿雛の中でも御殿の造りがきわめて精巧で規模も大きく、その全高は83cmにも達するという点で、他に例を見ないのである。紫宸殿の中には内裏雛(No.1-2・1-3)・三人官女(No.2-1～2-3)・五人囃子(No.3-1～3-5)のみが置かれ、個々の人形のサイズが大きく装束も精緻で全体に洗練されており、大正期人形群の中でも最高の逸品といえるであろう。三越呉服店がミニチュア主義の紫宸殿雛を発表してから6年後の時代に、三越本店にほど近い場所になおも店を構えていた鳳雲斎玉舟は、こうしたすぐれた作品を生み出していたのであった。

なお玉舟作の人形は、この紫宸殿に付随するもの一式のほかは「和歌三神」・「塚原卜伝」・「宮本武蔵試合」などを見るのみで、決して多くはない。明治期の雛人形の主流をなしていた玉舟作品は、大正期に入ってから影をひそめたかの観があって、特に鈴木家群の中にはただのひとつも見られない。鈴木家に雛人形が贈られた1925年(大正15年)の直前には、1923年(同12年)に関東大震災が発生しており、東京日本橋の人形師たちは壊滅的な被害を受けたことが知られている。多くの人形師は埼玉県内などへ一時的に疎開したり、郊外移転を余儀なくされていたのであったが、そのまま廃業に追い込まれた工房も少なくなかった。後述するように、玉舟は昭和期に入ってから営業を続けていたことがわかっているので、廃業してしまったわけではないものの、震災の打撃を受けなかったはずはなく、一時的な停滞状況の中に置かれていたのかも知れない。玉舟に代わって大正期の主流をなすのは、何といても明月であろう。明月作の多くの人形が田中本家・鈴木家に贈られており、その数は第1位の座を占めるまでになった。その背景には、もちろん長野市の中越屋の存在がある。中越屋はいわば事実上の明月の特約店なのであったから、そこから購入された雛人

形はみな明月作とならざるを得ない。すでに見てきたように、大正期には多くの家々・人々が中越屋から雛人形を調達するようになってきており、それを通じて大量の明月作の人形が地域に流通・普及していく結果をもたらした。さらに、鳳雲齋玉舟・東照際明月などの大手以外にも、たくさんの中小工房が登場するというのも大正期の特徴で、「吉磯」・「東雲齋新月」・「玉壽」・「香月」・「愛林堂観月」・「天明齋昇月」・「幸月」などが新たに現われている。三越呉服店製の人形なども、なお引き続き見られることの方で、明治期に隆盛を示した千秋齋一峯などは影も形もなく、大正期には消え失せているのである。人形師の興亡・消長には、まことに激しいものがあった。

参考までに雛人形の収納箱の中から確認された、これら人形師・人形商の商標ラベルについても少々見ておくことにしよう。この時代の商標ラベルは計21種類を確認することができるが(表7・写真33～45)、玉舟(市原長太郎)のそれには、数々の博覧会に作品を出品して多くの褒賞を得た旨の履歴が、こと細かく書き込まれていて興味深い(写真33)。明月のラベルは、3種類を確認することができる(写真34～36)。三越呉服店のそれには、作品名がいちいち刷られていたようで、いかにも近代であった(写真37)。販売業者のラベルとしては当然、在地大手の中越屋のものが3種類ほど見られたが(写真44～45)、多色刷りの凝ったデザインのものも見られる。中越屋のラベルは、木箱蓋の表の真ん中の、もっとも目立つ位置に貼られていることが多く、あたかも中越屋がその人形を自ら製作したかのように見せている。それに対して人形師のラベルは蓋裏などの片隅などに、ひっそりと貼られているのが普通である。いずれにしても、メーカーと売り手との2枚のラベルがそこに残されることによって、雛人形の製造販売の履歴と流通過程を知れるようになった。それもまた、大正期の雛人形の特徴であったといえるであろう。

表7 大正期の雛人形のラベル一覧

区分	業者名	記載	写真	
製造業者	⑤鳳雲齋玉舟	内國勸業博覧會名譽褒賞受領・内國々益博覧會有効金牌受領・内國々益博覧會名譽金牌受領・東京勸業博覧會名譽褒賞受領・関西聯合共進會三等銅牌受領・日英大博覧會名譽褒賞受領。御雛人形師、東京市日本橋區本石町三丁目壹番地十軒店、美術御雛人形師、鳳雲齋玉舟市原長太郎(印)。電話本局五千百六拾三番。	33	
	⑥東光齋玉翁	東光齋玉翁(印)		
	⑦東照齋明月	東照齋明月	34	
	⑧東照齋明月	銀杯受領、東照齋明月	35	
	⑨東照齋明月	御雛人形店、明月、東京市日本橋通十軒店町	36	
	⑩三越呉服店	末廣、三越呉服店製	37	
	⑪吉磯	賜御買上榮・有効賞領、吉磯謹製(印)		
	⑫東雲齋新月	東雲齋新月(印)	38	
	⑬玉壽	玉壽(印)	39	
	⑭香月	於物産共進會金牌受領、香月(印)	40	
	⑮愛林堂観月	商標愛林堂観月	41	
	⑯天明齋昇月	天明齋昇月(印)	42	
	⑰幸月	幸月(印)	43	
	販売業者	⑱中越屋	漆器指物際物、中越屋、長野市西後町	
		⑲中越屋	御雛、長野市中越屋本店、電話三一八番	44
		⑳中越屋	御雛、中越屋特製	45
		㉑中越屋?	膳椀筆筒長持□□銀杯水盃硯箱□□□□□□□□	



写真33 ラベル⑤(玉舟)



写真34 ラベル⑦(明月)



写真35 ラベル⑧(明月)



写真36 ラベル⑨(明月)



写真37 ラベル⑩
(三越呉服店)



写真38 ラベル⑫
(新月)



写真39 ラベル⑬
(玉壽)



写真40 ラベル⑭
(香月)

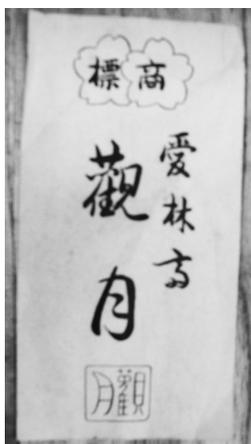


写真41 ラベル⑮
(観月)



写真42 ラベル⑯
(昇月)



写真43 ラベル⑰
(幸月)



写真44 ラベル⑱
(中越屋)



写真45 ラベル⑳
(中越屋)

5 昭和期の雛人形

5-1 昭和期の雛人形の特徴

田中本家の膨大な雛人形のコレクションの最後を飾るのは、昭和期のそれである。この時代における同家の中心人物はもちろん、第11代当主田中太郎であって、その妻久美子との間に3女をもうけており、その長女である田中洋子氏（現当主田中宏和氏夫人・田中本家博物館副館長）の出生年は1950年（昭和25年）のことであった。その翌年の1951年（同26年）4月には同氏の初節供祝が盛大になされ、それを機に雛土蔵に眠っていたすべての雛人形コレクションをすべて取り出し、1894年（明治27年）の雛飾図にもとづいて飾りつけがなされ（写真1）、かつての雛祭りの様子が忠実に再現されたということは、すでに述べた。また、洋子氏の母親である田中久美子の実家（長野県上田市）からは、新たに7段飾りの雛人形一式が贈られ（写真46・表8）、それが田中本家における昭和期の雛人形コレクションを構成しているということになる。それは女兒の初節供祝に、嫁の里方から雛人形が贈られるという一般的習慣が、ここにおいて初めて確立されたことを意味し、明治・大正期におけるそのあり方とは大きく異なっている。

昭和期の雛人形はそのように、一揃いの人形群となっているわけで、今日の一般的な雛飾りの様式が、ここに初めて現れたといえる。今までの各時代の雛人形のように、個々ばらばらの人形を購入したり、贈ったりすることがなくなったかわりに、多種多彩な題材物人形や組人形というものが消え失せて、標準的で画一的な構成になったともいえる。それは全国的な傾向でもあって、雛飾りの現代化といってもよい。そこでの装飾の基本形式は次のようになっている。まず、最上段には一対の内裏雛（No.1-1・1-2）が置かれ、金屏風・雪洞・御神酒三方も配置される。2段目には三人官女（No.2-1～3）がおり、左手が提鉋子官女、中央が三方持官女、右手が長柄鉋子官女となっていて、3人の間には一対の高杯が置かれるが、本来はここに紅白の鏡餅が乗せられる。3段目は五人囃子（No.3-1～5）で、左から平太鼓人・大皮鼓人・小鼓人・笛人・謡人が並ぶ。4段目は供物棚で、御料本膳と菱台が1対づつ置かれる。今日の一般的な飾り方では、それらの両端に隨身1対が配置されることが多いが、ここでは隨身（No.4-1・4-2）は次の5段目に移されている。そして左大臣・右大臣の間に、雛道具の鏡台・針箱が置かれるというのも、現代の標準的な様式から見れば、やや異色といえよう。6段目の三人仕丁（No.5-1～3）は左が立長柄傘持、中央が杓台持、右が台平笠持となっている。最後の7段目は両脇に右近桜・左近橘の造花、中央に御所車（牛車）が置かれている。昭和期は雛人形の大量生産化の時代にあって、粗悪な人形が全国的に流通し、その反面、雛道具類などはプラスチック加工の導入で多種類化が進み、華美を競う傾向が見られたものの、この田中本家の昭和雛はまったくそうではない。個々の人形の造りはきわめて精巧であって、雛道具類は簡素であるが細やかな漆芸がほどこされていて、プラスチック製品などはもちろん用いられていない。多種類・華美化の方向性を排し、簡素美を追求しているがゆえに品格が確保されているわけで、非常に上品で優美な人形群といえる。また、1951年（昭和26年）というこの時代に、7段飾りというのは大変に豪華なものであったのは明らかなことで、破格といってもよいであろう。なお、これら一揃いの人形群とは別に、「潮汲（No.6）」・「三番叟（No.7）」の単体人形があって、いずれも非常に洗練された作品であることは、7段飾りの方とも共通している。

表8 昭和期の雛人形一覧

No.	名称	計測値	購入時	購入者	写真
1-1	内裏雛(男雛)	290	1951	田中久美子実家(上田市)	46
1-2	内裏雛(女雛)	290	1951	田中久美子実家(上田市)	46
2-1	三人官女(提銚子)	230	1951	田中久美子実家(上田市)	46
2-2	三人官女(三方)	160	1951	田中久美子実家(上田市)	46
2-3	三人官女(長柄銚子)	230	1951	田中久美子実家(上田市)	46
3-1	五人囃子(平太鼓)	155	1951	田中久美子実家(上田市)	46
3-2	五人囃子(大皮鼓)	185	1951	田中久美子実家(上田市)	46
3-3	五人囃子(小鼓)	185	1951	田中久美子実家(上田市)	46
3-4	五人囃子(笛)	155	1951	田中久美子実家(上田市)	46
3-5	五人囃子(謡)	155	1951	田中久美子実家(上田市)	46
4-1	隨身(左大臣)	230	1951	田中久美子実家(上田市)	46
4-2	隨身(右大臣)	230	1951	田中久美子実家(上田市)	46
5-1	仕丁(台笠)	150	1951	田中久美子実家(上田市)	46
5-2	仕丁(三方)	150	1951	田中久美子実家(上田市)	46
5-3	仕丁(立傘)	150	1951	田中久美子実家(上田市)	46
6	潮汲	460	1951		
7	三番叟	60	1951		

注)計測値は台座を含まない全高のみを表示し,単位はmm.



写真46 昭和期の雛人形

なお余談ながら、この昭和期の雛人形を飾る際に田中本家博物館では、内裏雛の男雛を向かって左に、女雛を右に配置しており、明治・大正期のものについてはその逆としていることには注目される。雛人形の男女・左右尊卑の問題は、古くからさまざまに議論されてきたところであって[森,1913:pp.10-13・長沢,2006:pp.5-6]、関東風・関西風の雛飾りの相違も、もちろんこのことと関連する。「左上位・右下位」は日本古来の伝統的な考え方であって、中国の「天子南面」の思想がその淵源にあるともいわれている。つまり君主が南を向いた時、太陽の昇る東方左側を上位としたわけで、「右上位・左下位」という西洋の考え方の逆である。しかし、西洋にはレディ・ファーストという習慣があるため、男性は女性に上位位置を譲って左側に立つことになっている（ただし路上においては車道側が男性で、女性を守る）。左大臣の方が右大臣よりも格上であるのと同様に、内裏雛の男雛は左手（向かって右側）に置かれるのが古来よりの習慣で、関西（特に京都）では今もそれを守っている。関東でそれが逆転したのは昭和時代になってからのことで、昭和天皇の即位礼の際に天皇が皇后の右手（向かって左側）に立ち、初めて西洋式スタイルを取ったことになったためといわれている。したがって田中本家の雛人形も、昭和期のものは関東風に、近世～大正期のものは関西風に飾られているというわけなのであった。

5-2 昭和期の人形師たちの動向

さて、この昭和期という時代において、田中本家に多くの雛人形を供給し続けてきた東京の人形師たちはその後、一体どうなったのであろうか。参考までに少し触れておくことにしよう。明治・大正期の雛人形の調査を通じて、明らかになった人形師・メーカーの名は今まで見てきた通り、鳳雲齋玉舟・千秋齋一峯・光玉・三越呉服店・東光齋玉翁・東照齋明月・吉磯・東雲齋新月・玉壽・香月・愛林堂観月・天明堂昇月・幸月の計13業者を数えた。これらのその後の動向について見てみる際に、先にも少し触れた1923年（大正12年）9月1日の関東大震災による東京日本橋地区の甚大な被災のことが、やはり念頭に置かれねばならない。震災にともなう大規模火災によって、ほとんどの人形師の工房・店舗は全焼してしまい、焼け出された人形師たちは、縁故を頼りつつ、主として現在の埼玉県岩槻市内に疎開していくこととなった。岩槻はもちろん、人形の産地として知られていた地であったから、同業者が多くおり、働き口もいろいろあったわけである。この疎開は一時的なもので、東京の震災復興の進んだ1926年（大正15年）頃までに、ほとんどの東京の人形師たちは帰京することができたのであったが、彼らは岩槻在住中の3年間に中央のすぐれた人形製作の技術を地元人形師らに伝え、岩槻人形の技術革新に多大な貢献をもたらしたものであった[岩槻市役諸市史編さん室(編),1985:p.1007]。しかしながら、東京へ戻った人形師たちも、決して順風満帆であったわけではなく、その後の大恐慌や生活の近代化による雛人形の需要の低迷、旧態依然とした経営態勢の制約などもあって、時代の流れに適応できず、廃業に追い込まれた業者もまた多かった。しかも、三越百貨店や「久月」・「吉徳」・「秀月」などの大手業者が経営の近代化を進め、人形の大量販売と市場占有の拡大に乗り出していった結果、中小メーカーは競合に勝てず、しだいに淘汰されていくことにもなった。

表9は、郷土玩具研究の大家として知られる有坂与太郎が、1931年（昭和6年）現在時における全国の雛人形製作業者の実態調査をおこなった際の調査結果から[有坂,1931:pp.213-221]、田中本家

の収蔵品にその作品を残す東京市内の人形師らの名を抜き出してみたものである。見ての通り、先の13業者のうちで、この時代になお存続していたものは、鳳雲斎玉舟・東光斎玉翁・東照斎明月・東雲斎新月・玉壽の5業者（三越呉服店を加えれば6業者）に過ぎず、昭和の時代にまで生き残ったものは半分にも満たなかったということになる。旧十軒店地区を離れた人形師たちもおり、明月などは浅草区南元町へ移転することとなった。新月・玉壽の旧居住地はわからないが、やはり日本橋の本拠地を離れたものかも知れない。近世期以来の創業地である日本橋本石町に、なおも残り続けるのは玉舟・玉翁のみであった。大手以外の中小業者の衰退傾向は昭和戦後期にあっても同様であるし、平成期に至っては少子化のあおりを受けて、大手業者でさえ経営難に直面しており、2004年（平成16年）にはかの「秀月」までもが倒産に追い込まれたほどであった。⁽¹⁾

表9 1931年(昭和6年)現在の東京の雛人形師

屋号	人形師名	居住地
明月	木原善太郎	東京市浅草区南元町十五
新月	水村新蔵	〃 〃 馬道町五丁目四
玉舟	市原長太郎	〃 日本橋区本石町三丁目一
玉翁	渡辺芳次郎	〃 〃 〃 〃
玉壽	鈴木観太郎	〃 下谷区南稲荷町八十

注)有坂,1931:pp.213-221による。

おわりに

田中本家に伝えられてきた多数の雛人形とその関連資料に関する調査報告は、ひとまずここに一応の作業の終了をみた。各時代の人形群は、それぞれの時代的特色をよく示しており、たとえば近世期のそれは数は少ないものの、非常にすぐれた製作技巧と芸術性を保持しており、当代第一級の作品群をなしていた。3対の内裏雛と2組の囃子人形、さらには原舟月作とされる行列人形が、雛段上に並ぶという当時の雛飾りの壮麗さは、まさに有数の豪商家ならではのものではあったとはいえ、今は残された雛飾図からそれを想像してみるほかはない。もし須坂騒動による損失というものがあったならば、私たちは今それをこの目で、見ることはできなかったはずなのである。しかるにその喪失は、明治期におけるたった1人の女兒の誕生によって、一気に埋められることとなり、首都中央の極上の人形群が大量に導入されることを通じて、一大コレクションの基礎がほぼ完成されることとなって、雛飾図にも大幅な改訂が加えられることとなった。しかもそれらの人形のほとんどは、当事家自らの手で買い付けられたものなのであって、いわゆる贈り雛の習俗がまだ十分には見られなかったということなどもわかった。引き続き大正期にもまた、2家分の初節供に関わる大量の人形群が新たに収蔵されることとなり、コレクションはさらなる充実をみることとなった。それらは1910～1920年代の流行実態をよくとどめるもので、しかも多くの家々から贈られた祝品としての性格を持っており、雛人形とは当事家との縁故関係にもとづいて、他家から贈られるべきものとなった。それを可能にしたのは、在地人形商の新たな登場ということであった。引き続き昭和期にあつては、そうした習慣もほぼ影をひそめ、雛人形は嫁の里方から贈られるべきものという、一般的な節供習俗がそこに定着することとなって、単体人形での贈答ということもなくなり、一揃いの段飾りの時代に入ったのである。

田中本家に伝えられた多数の雛人形と関連資料は、100年間にわたる当地方の豪商家における三月節供行事の歴史を、私たちに対して無言のまま、あくまでも静かに語りかけ続けている。4つの時代にまたがる、あまりにも貴重で膨大なこの資料群のタイムカプセルは未来永劫、手厚く守られていかねばならない。本報告がそのための一助となったならば、誠に幸いなことである。

〔付記〕

本稿は、国立歴史民俗博物館の企画による今回の共同研究「歴史表象の形成と消費文化」の第10回研究会における筆者の研究発表を文章化したものである。発表は「田中本家の雛人形」と題し、長野県須坂市の高井郡旧郡役所市民交流室2において2012年8月30日におこなわれた。また、本稿をまとめるためになされた2010年～2012年の3年間にわたる調査に際しては、田中本家博物館の田中宏和前館長・田中洋子副館長・田中和仁館長による多大な御協力をいただいた。心からの感謝の意を、ここに述べておくものである。

註

(1)——「人形の秀月」の名で知られる節供人形販売大手の「秀月人形チェーン」と、グループ企業の雑貨販売大手「ゼア」は(本社はいずれも東京都台東区内にある)2004年、民事再生法の適用を東京地裁に申請し、負債総額は計約37億円と発表された。秀月人形チェーンは、少子化の影響で本業の人形販売が著しく落ち込み、1997年6月期に約145億円だった売上高が、2003年6月期には半分の約70億円にまで減少していた。2004年に入ってから資金繰りが難航し、ついに経営破綻にまで追い込まれた。

文献

有坂与太郎, 1931『日本雛祭考』, 建設社。
 青木廣安, 1994「須坂騒動に巻き込まれた田中家」『豪商の館—信州須坂田中本家—』, 田中本家博物館。
 DEN企画工房(編), 2002『昭和のはじめ—長野の町—』, 光風舎。
 藤田順子, 1994「舟月の人形を見つけて」『豪商の館—信州須坂田中本家—』, 田中本家博物館。
 平尾朋子, 1994「奉公人と出入り職人」『豪商の館—信州須坂田中本家—』, 田中本家博物館。
 市川健夫, 1994「近世の正倉院 田中本家博物館」『豪商の館—信州須坂田中本家—』, 田中本家博物館。
 岩槻市役所市史編さん室(編), 1985『岩槻市史・通史編』, 岩槻市役所。
 是澤博昭, 2003「江戸の雛祭り—成立過程・名工・上田からの再検討—」『上田の雛人形』, 上田市立博物館。
 是澤博昭・塩野谷孝一・他, 2003「人形玩具展示保存の諸問題—全国的視野に立った検討—」『日本人形玩具学会誌』 No.13, 日本人形玩具学会。
 宮川匡寛, 2002「『田中本家博物館』における人形や玩具の保存と展示について」『日本人形玩具学会誌』 No.13, 日本人形玩具学会。
 森 三溪, 1913「日本の左尊右卑習俗」『風俗画報』 No.441, 東陽堂。
 長野商業会議所(編), 1927『長野商工人名録』, 長野商業会議所。
 長沢利明, 1999『江戸東京の年中行事』, 三弥井書店。
 長沢利明, 2006「江戸東京歳時記をあるく(第42回)—雛人形の飾り方—」『柏書房ホームページ』2006年3月号, 柏書房。
 奥村彪生, 1994「再現された江戸の宴」『豪商の館—信州須坂田中本家—』, 田中本家博物館。
 大河直躬, 1994「豪商の館の建築」『豪商の館—信州須坂田中本家—』, 田中本家博物館。
 鈴木 勲, 1994「生活文化保護のモデル」『豪商の館—信州須坂田中本家—』, 田中本家博物館。
 田中宏和, 1994「田中家の家紋」『豪商の館—信州須坂田中本家—』, 田中本家博物館。
 田中 淳, 1994「田中家の江戸屋敷地」『豪商の館—信州須坂田中本家—』, 田中本家博物館。
 田中和仁, 2012「このすばらしい文化を残したくて」『歴博』 No.173, 国立歴史民俗博物館。

田中太郎, 1989『田中家の古文書』, ほおずき書籍株式会社.
東陽堂(編), 1911「天下一品の雛」『風俗画報』No.419, 東陽堂.
上田市立博物館(編), 2003『上田の雛人形』, 上田市立博物館.

(東京理科大学非常勤講師, 国立歴史民俗博物館共同研究員)

(2014年12月1日受付, 2015年3月19日審査終了)